
リンの旅記 プラチナ

うらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンの旅記 プラチナ

【Nコード】

N4893K

【作者名】

うしろ

【あらすじ】

フタバタウン出身のリンはパートナーのスイウと共に冒険の旅へと出かけます。そこではいろいろな出会いが待ち受けています。ときには素敵な人や、最低な人。またまた、運命の人にも出会ってしまいます。

リンの旅のフィナーレはどのように…？

リンの旅立ち（前書き）

とりあえず主人公のリンに来てもらいましたー！

リン

こんにちは！

そう言えば、うららさん。

何ですかー？

リン

どうしてとりあえず、何ですか？

え…えーっと…わっ私にも色々と諸事情があるのよっ！（汗）

リン

ホント何ですかー？

ほっホントだもん！（；、、）
でっではスタートですっ！

リン

逃げたね。完ぺき。

リンの旅立ち

「スイウー！行くよー！」

青々しい若葉が芽を出し始め、本格的な春にようやくなつたフタバタウンにその声の主、リンはいた。

「ゴロゴロッ！」

足下から声が聞こえ、下を向くと最愛のパートナーのミスゴロウ…スイウの姿があった。スイウを抱え、リンは後ろを向いた。

長く、明るい青色の髪を垂らし、心配そうな顔でリンをみている母…ランの姿があった。

母は元トップコーディネーター。父は凄腕のポケモントレーナーらしいが、只今消息不明。

リンは父をあまり知らない。ほとんどランに育てられたようなものだ。

最愛のパートナーのスイウは、ランのラグラージと父…ユウキのりザードンの間にできた卵から孵った。

リンはランにニコリと笑いながら言った。

「ママ、行ってきます。」

「気をつけてね。何かあったらすぐに連絡するのよ？」

相変わらず心配性なんだから。とリンは肩をすくめる。

「はいはい。わかってるって。じゃあ行ってきまーす!」

「ゴロゴロー!」

スイウも元気よく別れを告げる。家の庭では、スイウの母であるラグラージが水を撒いていた。

「ラグラージ、行ってくるね。スイウ、ちゃんとママに言いなさい?」

そう言ってリンはスイウを地面に下ろす。スイウはトテトテとラグラージの下に向かった。

「ゴロゴローロツ」

「ラゲー。ラグラゲ?」

「ゴロツ!ゴロゴロー!」

「ラグラゲー!」

そんな調子でラン、ラグラージと別れ、ずんずん歩いていくとフタバタウンと201番道路の境目に出た。

「スイウ、やっと私たちの旅が始まるねっ!」

「ゴロゴロツ」

スイウも楽しみだったようだ。その証拠に、頭のヒレと尻尾が大きく揺れている。

「まずはマサゴに行かなきゃー…って、あれ？私…何か忘れてるよ
うな…？」

と立ち止まったとき、後ろから声が聞こえてきた。

「リーン！」

と金髪の少年が言った。リンの隣まで来ると、肩で息をした。

「あれ？ジュン？先に行ってたんじゃないの？」

とリンはジュンに不思議そうに言う。かなりせつかちなこの幼馴染みは、さっさとリンを置いて先に行ってしまうこともしばしばなのだ。

「おっお前がいなきやまっマサゴまで行けねえじゃんよ…。」

「あっそっか。ごめんごめん、ジュン。すっかり忘れてた。」

アハハとリンが笑う。その笑顔はまるで可憐な花のようだった。ちなみに、ランはかなりの美人だ。リンはランに良く似たのだった。

「いつ行くぞ…／＼／＼／」

いつも見るリンの笑顔に何故かドキドキしてしまったジュン。なぜこんなにも胸が高鳴るのか、本人は全くわかっていない。

「(オレ…走りすぎなのか…?)」

と思ってしまう始末であった。

そんなジュンに構わず、リンはさっさと草むらに入っていく。

「おっおい！待てよリン！」

「ジュンが遅いのがいけないんでしょ？」

とか言いながらもちゃんとジュンの為に立ち止まるリン。理由はただ単に、離れたら危ないから、である。

「ゴロゴーロツ。」

スイウもうんうんと頷いている。

草むらを抜ける間、一匹も野生のポケモンに会わなかった。それは、スイウのレベルが高いことを意味していた。

「マサゴに到着…って、あれ？コウキ？」

とリンは目の前の人物に話しかける。話しかけられたその人はびっくりして振り返った。

「リン！？」

とコウキは目を真ん丸にした。オレもいるぜ！とジュンは叫んだ。

「久しぶりだねーコウキ。元気だった？」

「うん、まあまあかな。にしても、スイウのレベル、また上がった？傷跡が増えた気がするけど？」

さすがナナカマド博士の助手を勤めるだけあり、ポケモンの変化にはすぐに気がついた。

「うん。旅にでるからねー。レベルは高くても問題はないでしょ？」

「まあ確かにそうだな。そうだ、二人は博士に会いに来たんだろ？さあ入った入ったー！」

「えっ！？ちよっコウキ！押さないで！」

「あっごめんごめん。」

ハハハとコウキは頭を擦りながら笑った。

「まったくお前はいつつもそうじゃねーかよー！」

「うっせーなー！そう言うお前だって相変わらずせっかちなんだろーがよー！」

とジュンとコウキがいがみ合う。それをいつも止めるのはリンだ。

「まあまあ、二人とも口論はそれぐらいにし…。」

「邪魔すんなー！！」

と言葉を遮られた上に、二人に同時に言われる。リンの頭の血管がブチツと切れる音がした。

「スイウ、ハイドロポンプ。」

静かな声でリンがスイウに指示を出す。スイウはやる気満々だ。スイウはリンと同じ気持ちのようだ。

「ゴーローツ！」

「「うわああ！」」

多少手加減はしているものの、二人を正気に戻させるためには十分過ぎた。

「「あんな口きいてすいませんでした！！これからは絶対にしません！！」」

とジュンとコウキが同時に土下座して謝る。

「いいわ。さてと、ナナカマド博士のところに向かいましょー。」

そう言ってリンはスイウを抱え、ナナカマド研究所へ入っていった。

リンの旅立ち（後書き）

さあーとど！

ここで、リンとスイウの紹介をしようと思います！

まずはリン！

【リン】

明るく、曲がったことがキライ。

少し寂しがり屋なところも…。

ミズゴロウのスイウは親友であり、最愛のパートナー！。

【スイウ】

ミズゴロウのメス。

ランのラグラージとユウキのリザードンの間にできた卵から産まれる。

リンとは、親友で最愛のパートナー！。

《覚えている技》

- ・ ハイドロポンプ
- ・ 冷凍ビーム
- ・ 地震
- ・ 守る

こんな感じ…ですね。

もしかしたら、気まぐれで技が変わったり、増えたりするかもしれ

ません。

そんなときは、

「このバカ作者が！」

と罵って頂けると、泣きながら反省いたします…(T-T)

さて、次回予告は、リンに任せたいと思います

リン、よろしくー

リン

任せて下さいっ。

今回は、

「私がそんな大役をー!?!」【前編】
です!

お楽しみに!

(にしても…私何を任されるのかな…?)

一つお詫びです!

×カメックス リザードン

でした!

私のミスです…。

すみません…。

私がそんな大役をー！？【前編】（前書き）

ー！
前回はリンに来てもらったので、今回はコウキに来てもらいました

>コウキ<

うーらら さん！

僕のキャラがゲームとはだいぶ違っていてどういうことですか！

えっ…それは…その…。

ぜっ前回の後書きで説明した通りだよ！

>コウキ<

ふーん？

本当に？

本当だもん！

私そんな嘘つかないもん！

>コウキ<

うーらら さんがそこまで言うんなら僕はもう言いません。

でも、ジユンにも説明をしないとイケませんよ？w

そうだった〜！

ふえ〜ん！

もう知らないよお〜！

>コウキ<

あれ？

うらら さん。

そのラグラージは…？

もしかして…？

「私がそんな大役を！？」【前編】
スタートですう！（p|q）エーン

私がそんな大役をー！？【前編】

「ナナカマド博士ー！こんにちはー！」

リンは慣れた様子でナナカマド研究所内に入る。

「おお！リンじゃないか！久しぶりだな。」

「お久しぶりです。ナナカマド博士。」

「ゴロゴロッ！」

「スイウも久しぶりだな。」

「ゴロゴロー」

スイウはナナカマド博士に撫でられて嬉しそうだ。

後ろからジュンとコウキがやってきた。

「ナナカマド博士ー！早くポケモンくれよー！さっさと旅に出ねえとリンに追い越されちまうんだよ！」

ジュンはリンを横目で睨みながら言った。

「あら。悪いけど、ジュンなんかには追い越されないわよ。」

とリンは挑発するように言う。

そこで、いい加減しびれを切らしたジユンが言った。

「博士ー！いい加減ポケモンくれよー！」

「わかったわかった。全くお前は相変わらずせつかちな。」

そう言っただけでナナカマド博士は奥の部屋からモンスターボールを二つ持ってきた。

「あれ？どうしてモンスターボールが二つなの？」

「僕がもう一匹もらったからね。」

とコウキが腰からモンスターボールを一つ取り出した。

「何もらったの？」

「ヒコザルだよ。出で来い！ヒコザル！」

コウキがモンスターボールを投げると、ボールが開いた。

「ヒッコヒッコ！」

小さなサルのようなポケモンが元気よくリンに挨拶した。

「カワイイ！スイウ、挨拶は？」

「ゴロゴロッ！」

スイウは元気よく挨拶をした。

「あれ？コウキ、ヒコザルを少し育てた？」

「リン、よくわかったね。とはいっても、ほんの少しなんだけどね。さすがリンだ！」

「へへへー。ありがとう。」

リンが照れくさそうに笑ったとき、ジュンがいきなりリンの方を向いて言った。

「リン！スイウって、進化したらラグラージになるよな!？」

「ええ。珍しいわね。ジュンがそんなこと聞くなんて。霰でも降るわけ？」

リンは心底びっくりしたように言う。

「失礼だな！オレだって何も知らないわけじゃないんだぜ!？」

「ふ〜ん？なら、ミズゴロウの次、ラグラージの前って何でしょう？」

「はあ？んなの常識だぜ！直でラグラージだろ！お前が間違えてどうすんだ!！」

ジュンはリンを馬鹿にしたように笑う…が、実際に馬鹿だったのは、ご察しの通りジュンである。

「ジュン…早く決めろ…お前は疲れる…。」

とナナカマド博士が頭を抱えて言う。

「なっなんだってんだよ！オレはもう決めたぜ！オレのパートナーはこいつだ！」

と一人ハイテンションなジュンは一つのモンスターボールを掲げた。

「ほほう…そいつにするのか…なかなか悪くない選択だな。」

とナナカマド博士が少し見直したように言う。

「だろっ！？さて、リン！今からオレは未来のチャンピオンのジュン様だ！そんなオレが指名してやる！リン！オレのこいつとお前のスイウでバトルだ！」

「いいわよ。バトルは好きだし。でも、ジュンのもらったばかりのポケモンと私のスイウじゃレベル差がありすぎるわよ？それでもいいわけ？」

「オレは別にいいぜ！なんだってオレは未来のチャンピオンなんだから、負けるわけないんだ！」

と変な自信を持つジュンを置いて、リンとコウキと（なぜか）ナナカマド博士が研究所裏のバトルフィールドへと向かった。ジュンは意外にも、きちんとついてきていた。

私がそんな大役をー！？【前編】（後書き）

一つ訂正です。

書いていたら、あまりにも長くなってしまったので【前編】とさせていただきます。

大変申しわけ…。

> ジュン <

おいっちらら！

どういことだ！

ちゃんと説明しろ！

うるさい！

今謝罪中なんだから静かにして！
本当に申し訳…。

> ジュン <

っちらら！

ちゃんと説明…。

うるさい！

> コウキ <

あっ…！

っちらら　さんがキレた！

> リン <

しかもスイウのママもキレてる…！

ラグラージ…ハイドロカノン…。

ラーグー!!! (怒)

> ジュン <

うわあああああ!

キラリン

さて、見苦しいところをお見せしてしまってすみませんでした。
かさねてお詫び申し上げます。

ちなみに、スイウの母親は私のパートナーのラグラージです。

さて次回予告!

リンよろしく。

> リン <

は、はい!

今回は「私がそんな大役をー!? 【後編】」です!

(私がどんなことをするのか気になるけど…うらら さん今怖いから聞くのはやめとじ…)

私がそんな大役をー！？【後編】（前書き）

リン

う、うちらら さん…？

なあに？

リン

い、いえ…。

（この人…怖い…。本気で怒らせたらヤバいかも…。）

コウキ

うちらら さん、ジュンはどこまで飛んでいきましたか？

そうだね…テンガン山あたり？

リン

ちなみに現在地は？

ミオ

リン・コウキ

……………。

どうかした？

リン・コウキ

いえ…別に…。

あれあれ？

リン

「私にこんな大役をー！？」【後編】スタートです。

あれ！？

頼んでないのに勝手に始まっちゃった！

私がそんな大役をー！？【後編】

「ではこれから、新人トレーナージュンVS同じく新人トレーナーリンの1対1のシングルバトルを行います！」

「ジュン！手加減はしないからね！本気でいくよ！」

「望むところだ！行くぞ！」

「行くのよ！スイウ！」

「行っけー！ナエトル！」

「ゴロゴロッ！」

「ナー。」

ジュンのモンスターボールから出てきたのは、カメのようなポケモン。見た目同様、鳴き声までのんびりしている。

「草タイプのナエトルか…少し分が悪いわね。スイウ、頑張ろうね。」

「ゴロゴロッ！」

スイウは元気よく答えた。

「先攻は譲るわ。」

「っしゃー！ナエトル！葉っぱカッターだ！」

「ナールー！」

ナエトルの小さな頭の葉っぱから無数の葉っぱがスイウに襲いかかる。

「スイウ！回りながら冷凍ビーム！自分を中心に丸を作るのよ！」

「ゴーローツ！」

リンの指示通り、スイウは冷凍ビームで自分の周りに氷の膜を張った。葉っぱカッターは、その氷の中に閉じ込められている。氷の珠はキラキラ輝いてとても綺麗だ。

「なんだってんだよー！そんなのなしだぜ！」

「残念ながらありませんだよね。」

リンはクスクスと笑いながら言った。

「こうなったら…ナエトル！体当たりであの氷を壊すんだ！」

「ナー！」

どンドンナエトルが近づいてくる。

「スイウ！氷の珠ごと守る！」

リンの指示を聞いて、コウキとナナカマド博士は驚いた。

「そんな！どれだけ鍛えられてるんだ！スイウは！」

とコウキが言った。

「ふうむ…よし、決めたぞ。」

「えっ？もう決められたんですか？まだバトルは始まったばかりですよ？」

「うむ。わしの目に狂いはなかった。」

「そうですか。後でどちらなのか、教えて頂けるんですよね？」

「うむ。楽しみに待つがよい。」

「はい。」

その頃のバトルフィールドでは、スイウを囲んでいる氷を緑色の膜が覆っていた。その膜のお陰で体当たりは防ぐことができた。

「なんだってんだよー！そんなの反則だぜー！」

「だからありだって。そろそろ反撃の時間ね。スイウ！そのままナエトルに向かって走るのよ！」

「ゴーローツ！ゴロゴロゴロゴロ！」

スイウが氷の珠の中で走り始めると、氷の珠も動き始めた。だんだんその動きが速くなってくる。

「うわー！ナエトル！殻にこもるだ！」

「なっナー！」

慌てて殻にこもる…が、スピードの増したスイウの攻撃に間に合わず、攻撃が直撃した。直撃した拍子に氷の珠が割れ、割れた破片が太陽の光でキラキラ輝いていた。

「なっナエトル！？」

「なっナルー…。」

ナエトルは目を回している。一方、スイウはスタツとリンの前に着地した。

「ナエトル！戦闘不能！よってこの勝負、リンの勝ち！」

「やったあ！勝ったよ！スイウ！」

「ゴロゴロツ」

ナエトル、サンキューな。と言ってナエトルをボールに戻したジユンは、たまたまりんの方を見た。スイウと一緒に喜ぶリンを見ると、何故か顔が赤くなり、心臓の鼓動が激しくなる。

「（オレ…病気なのか…？）」

と思っていると、ナナカマド博士とコウキがリンのところに行っていた。慌ててリンのところに駆け寄る。

「やっと来たか、ジュン。」

とコウキが言う。ナナカマド博士はその声に反応して話し始める。

「リン、お前にもう一つのポケモン図鑑を託したい。」

とリンにポケモン図鑑を差し出ししながら言う。

「へっ！？私：ですか？」

「うむ。リンに託したい。旅の途中で様々なポケモンに出会おうと思う。そのポケモンたちをこの図鑑に記録していつてほしい。ポケモンを大切にし、なおかつ強いリンだから託すのだ。」

「わ、私で勤まるんでしょうか？」

「そうだぞー！それに、リンを越すのはオレだー！」

と後ろからジュンが言う…が、その言葉には耳を貸さなかった。

「頼む、リン。」

リンは少し考えたあと、こう答えた。

「はい。お任せ下さい。」

ナナカマド博士はその答えに満足したように頷いた。そして、リンにポケモン図鑑を渡した。

「では任せたぞ、リン。おっと、もうこんな時間か。すまない。今から会議があるんだ。コウキ、あとのことは任せたぞ。」

「はい、博士。」

ナナカマド博士はスタスタと研究所内へ戻っていった。

「リン、おめでとう。」

「あ、ありがとう…。どんな風に表示されるのかな？スイッチで試してみよ。」

ポケモン図鑑をスイッチに向けると、ミスゴロウの情報が音声で聞こえてきた。

「すーいー！」

「なんだってんだよ。」

とジユンは不貞腐れたように言う。

「リン、これから重要な役割を背負った旅が始まるんだ。おばさんに伝えに行ったらどう？」

「そうね。ママにポケモン図鑑手に入れたことを言わないとね。ジユン、ポケモンセンター寄ってから一回フタバタウンに戻らない？」

「オレはもう先に行く。さっさと行かねえとリンに追いつかれちゃうからな。」

「ふーん。わかった。なら、今度会ったとき、バトルしようね！」

「望むところだ！」

それから二人はポケセンまで一緒に行き、ジュンはコトブキシティへ、リンは一旦フタバタウンへと別れた。そして今はフタバタウンのリンの家の前。

「ママー！」

「ゴロゴロー！」

「リン！？スイウ！？やけに早かったわね。」

「違う違う！見て！ポケモン図鑑もらったの！」

とリンはランにポケモン図鑑を見せた。

「凄いじゃない！そんな役目をもらえるなんて！」

「あれ？ママ、ポケモン図鑑のこと知ってるの？」

リンはキョトンとして聞いた。

「知ってるものにも、パパが使ってたからね。そばでよく見てたのよ。」

とリンは懐かしそうに言う。ランとユウキは旅の途中で恋に落ち、そのまま結婚へと至ったのであった。

「ふーん。そうなんだ。まだお昼過ぎたばかりだし、今からコトブキシティに行ってくるわ。」

「そっか。行ってらっしゃい。そういえば、ジュンくんは？」

「ジュンなら先にコトブキシティに向かったけど？」

「あらそうなの？困ったわね。ユウコさんが渡すものがあったのに！って言ってたものだから。」

ランはユウコの声マネをして言う。ちなみに、ユウコはジュンママのことである。

「私、ジュンに渡しに行けるよ？ちょうど今からコトブキシティに向かうし。」

「それはいい考えね。ユウコさんにそれを言ってみたら？」

「うん。そうする。じゃあ行ってきます。」

「行ってらっしゃい。気をつけてね。」

「うん。」

「コロコロッ」

「スイウも行ってらっしゃい。」

家を出て、すぐお向かいのジュンの家に向かう。

ピンポンとインターホンを押すと、パタパタとユウコが出てきた。

「あらリンちゃん。どうしたの？」

「母から、おばさんが困っていると聞いたので私にお手伝いできることがあれば、と思いまして。」

「まあ。またジユンは先に行ったのね？一体誰に似たのやら。ちょっと待っててね？」

「はい。」

パタパタと部屋の中に入り、小さな小包を持って戻ってきた。

「これなのよ。ジユンに届けてくれる？」

「はい。お任せ下さい。」

「ゴロゴロッ」

「スイウちゃんも頼んだわよ？」

ユウコはスイウの頭を撫でた。スイウは嬉しそうだ。

「では行ってきます。」

「行ってらっしゃい。ジユンに渡してねー！」

「はあいー！」

「じつじつリンの旅はようやく始まったのであった。

私がそんな大役をー！？【後編】（後書き）

ジュン

はあ…はあ…はあ…はあ…

リン・コウキ

ジュンが帰ってきた！！

ジュンお帰りー。

ラゲツ。

ジュン

うっうらら！

何よそんなに怯えちゃってさー。そもそも、ジュンが邪魔するのがいけないんでしょ？

ジュン

う…。

ごめんなさいは？

ジュン

う…ごめんなさい…。

それでよろしい。

はい、仲直りの飴

ジユン

あ、ありがとうございます…。

どういたしまして。

そうそう、リンとコウキにはこのチョコだよー！

リン・コウキ

やったあ！

ジユン

まだ怒ってるよこの人！

そんな訳ないじゃない！ね、ラグラージ？

ラグッ。

ジユン

その微笑みがこええ…。

さてと、リン！

次回予告よろしく！

リン

はい！

今回は

「初めてのゲットと事故」【前編】です！

…ってあれ？

“事故”ってどういふことですか？うらら さん。

そっそれは秘密なのさっ！でっではまた次回なのですっ！

リン・コウキ・ジュン

(動揺してるよ…この人…。)

つっ次には皆さん良く知る人物が現れるのさっ！
では次回！なのさ！

リン・コウキ・ジュン

(やっぱり動揺してる…。)

初めてのゲットと事故【前編】（前書き）

はあ…。

リン

どうしたんですか？うららさん。
ため息なんかついて。

別になんでもないんだよ…。はあ…。

リン

うららさんがおかしくなっちゃった！
と、とりあえず

「初めてのゲットと事故」【前編】
のスタートです！

どうぞ…。

はあ…。

初めてのゲットと事故【前編】

フタバタウンから改めて旅立ったリンはポケセンに寄った。

ポケセンには、ナナカマド博士の助手のおじさんがいて、モンスターボールを10個くれた。それを愛用のピンクのポストンバックに入れ、マサゴコトブキの道を歩いていった。

ポストンバックの中には他に冒険ノートとナナカマド博士から、とコウキにもらった技マシン、“恩返し”が入っている。

「スイウー。ここは気持ちいいところだねー。」

「ゴロゴロー。」

スイウはリンの足下をトテトテとついてきている。

とそのとき、スイウが頭のヒレで何かを察知した。スイウはどこかへ走って向かっていく。

「スイウー！？どこ行くのー！？」

「ゴロツ！ゴロゴロツ！ゴロロー！」

スイウの普段見せない必死そうな表情が感じ取ったリンは、黙ってスイウのあとを追った。

しばらく行くと、切り株が見えてきた。そこには苦しそうに息をすする小さなポケモンの姿が。

「あれはっ！」

リンは慌ててポケモン図鑑をその小さなポケモンへ向ける。

ピツという音に反応したのか、その小さなポケモン…ラルトスが起き上がり、警戒し始めた…が、すぐに倒れる。

「ラルトス！」

ダツとリンとスイウはラルトスに近づいた…が、ラルトスの念力が邪魔をしてこれ以上は近づけない。

ラルトスの体力はもう限界だ、とポケモン図鑑が知らせる。

「ラルトス！それ以上技を使わないで！あなたの命に関わるわ！」

「ゴロツ！ゴロゴロツ！」

スイウも必死に説得する。

リンとスイウの必死の思いが通じたのか、はたまたラルトスの力が弱まったのか、どちらかは知らないが念力が弱まった。

今だ！と思い、リンはラルトスの下に駆け寄り、応急措置として傷薬が使った…が、ほとんど効果がないようだ。

「早くポケモンセンターに連れて行かなきゃ！スイウ！走るよ！」

「ゴロツ！」

もちろん！と答えるようにスイウが言った。

リンはラルトスを抱き抱えたまま、マサゴタウンのポケセンへと向かった。

「こ…この子の…診察を…お願いし…ます…はあ…はあ…はあ…」

「まあ！なんてこと！この子はあなたのポケモン？」

「いえ…違います…はあ…はあ…この子は…野生のラルトス…です…。この子が…^{スイウ}気づいたんです…。」

「ゴ…ゴロ…。」

リンもスイウもへとへとになっている。

「そう、わかったわ。ラッキー！すぐにオペの準備を！」

「ラッキー！」

とピンクの丸いポケモンが答えた。

「あなたは今日はここに泊まりなさい。この子の様子が気になるでしよう？」

「はい。」

「あそこのカウンターのジョーイに話しかけてね。じゃあ！」

そう言ってジョーイさんはラルトスをベッドに乗せ、オペ室へと向

かった。

リンは言われた通りチェックインを済ませ、今はオペ室の前で祈りながらラルトスを待っている。

約一時間後、ジョーイさんが姿が現した。

「ジョーイさん！ラルトスの様子は…？」

「もう大丈夫よ。意識が戻って体力が回復したら野生に戻るわ。それにしても変ね。このあたりには野生のラルトスはいないはずなんだけれど…。」

「えっ…？」

そういえば、と思い返す。確かラルトスの生息場所は208、209、212番道路だったはず…マサゴコトブキの道は202番道路だ、ということも。

確かにおかしい。

だが、このことはシンオウ地方で起こる事件のまだほんの序章に過ぎないことをリンは知らない。

しばらくして、ラルトスが目を覚ました。リンはラルトスが心配で堪らなくて、ずっとそばにいたのだった。

「よかった。ラルトス、目を覚ましたんだね？」

すでに日は傾き、窓から赤い光が照りつけていた。

「あつ、眩しいよね？今閉めるから。」

そう言つて席を立ち、カーテンを閉めた。

「ラルトス、大丈夫？怪我はもう平気？」

「ラ…ラル…。」

とラルトスが控えめに答えた。その返事に納得したリンとスイウは席を絶つた。

翌日、リンとスイウがラルトスがいた部屋を覗くと、そこにはもうラルトスはいなかった。ジョーイさんに聞くと、いつの間にかいなくなっていたらしいのだ。

リンとスイウは朝食をとり、ポケセンをチェックアウトして外へ出た。朝の日差しが眩しく、リンは目をしばしばさせた。

「スイウ、行こっか。」

「ゴロツ」

スイウは昨日からご機嫌だ。自分が見つけたポケモンが助かったのだから。

マサゴを抜け、草むらに入ろうとした瞬間、足下に何かがテレポトしてきた。

「ラル。」

昨日のラルトスだった。

「あら？お礼でも言いに来たの？そんなことしなくていいわよ。」

とリンは笑いながら言うが、ラルトスは必死に首を横に振る。

「？」

リンが不思議そうな顔をしてしゃがむと、ラルトスはリンにくっついてきた。

「ラルトス…あなた…もしかして…私たちと一緒に旅がしたいの？」

とリンが恐る恐る聞くと、ラルトスはコクコクと首を縦に降った。

「私なんかでいいの？」

「ラルー。」

ラルトスは甘えるように顔をリンの足に擦りつけた。

「…なら。」

リンはポストンバックからモンスターボールを取りだし、ラルトスの方に向けた。ラルトスはボールの中央のボタンを自分で押した。ラルトスがボールの中に吸い込まれる。2〜3回揺れるとボールは落ち着いた。

「スイウー！私初めてのゲットだよお！」

「ゴロゴロッ！」

スイウもリンと同じくらい喜んだ。そうだ、と言いリンはラルトスの入ったボールの中央を押しした。

「ラルトス、出てきて。」

「ラルー。」

変わらず小さな声のラルトス。

「スイウ、ラルトスに名前つけるから手伝ってよ。」

「ゴロッ!?!」

スイウはびっくりしたような顔をする。

「わかったわよー。なら自分で考える…の前に、ポケモン図鑑と…。」

ピツという音と共にラルトスの情報が音声で流れる。

「覚えてる技…念力、影分身、テレポート、おまじないね。特性はシンクロ。控えめで物音に敏感な…と。あら、あなた女の子なのね?」

「ラル。」

「なら可愛い名前をつけなきゃね。…決めた!ラルトスの名前はメ

「メイスよ。」

「ラ…ル…？」

ラルトスはキョトンとしている。

「あなたの新しい名前はメイス。よろしくね、メイス。」

「ラ…ラルー！」

このとき、控えめな性格のラルトス…いや、メイスが初めて大きな声を出したのだった。

メイスという新しい仲間を迎え、コトブキシティに入ったリンは、とりあえずポケセンでチェックインした。

ポケセンでジュンらしき人物がトレーナーズスクールへ向かったことを聞き、リンはトレスクに向かった。

途中でコウキに会い、一緒にトレスクに向かった。話しながらトレスクへ向かっていると、何か変なおじさんが街灯に身を潜める（？）ようにして立っていた。

「あ、あのー。おじさん、ここで何をしていますか？」

とコウキが恐る恐る聞く。

「なっ！？君たちは一体！？まさか私の正体がバレてしまったのかー！？」

と言ってそのおじさんは頭を抱えてしゃがみこんだ。

「おじさん、周りの人、見てますよ？」

リンがそう言うとその男性はスクツと立ち上がった。

「私はおじさんなどではない！国際警察のハンサムだ！」

「まさか…それ本名…？」

リンが若干ヒキながら聞く。

「ちがーう！コードネームだ！そうだ。偶然出会った君にこれをあげよう。私には必要ないからな。」

そう言ってハンサムと名乗る男性がリンに何かを渡した。

「…これは？」

「バトルレコーダーというのだそうだ。最近若者の間で流行っているらしい。何でも、特殊な施設でのバトルが録画できるらしい。」

「ふーん。そうなんですか。ありがとうございます。」

「いやいや。いいんだよ。その代わりと言ってはなんだが、私のことは秘密にしておいてくれ。」

「わかりました。バトルレコーダー、ありがとうございます。」

そう言ってリンはハンサムに頭を下げた。ハンサムはどこかへ去っ

て行った。

変なおじさん、と思いながらリンとコウキはトレスクへと急いだ。

「ジューン！」

「リン！？オレってばもう追い付かれちゃったのかよ！？」

ジューンの言葉はムシし、リンはバックの中からユウコから預かった小包を取り出した。

「はい。おばさんから。」

「何だ？これ？」

「知らないわよ。」

ジューンはビリビリと小包を開け始めた。

「タウンマップか。2つあるから1つやるよ。」

「えっ？あ、ありがとう。」

「じゃ、オレはもう行くから！じゃあな！リン！コウキ！」

「うん。じゃあね。」

「またな。」

無事にジューンに小包を渡したリンはコウキと別れ、コトブキシティ

を歩らしてみようとした。

ラグラージい！

地震&吹雪&波乗り！（p|q）エ・ン

リン・コウキ

イヤだあああ！

もう知らない！

次回は

「初めてのゲットと事故」【後編】
です！

それではまた！（p|q）エ・ン

初めてのゲットと事故【後編】（前書き）

重大なお知らせがあります！

なんと、投稿するものを間違えてしまいました！

すみません。

読まれた方、

あれ？おかしいな

と思われたと思います。

本当にすみませんでした！

今後、このようなミスをしないようにします！

初めてのゲットと事故【後編】

コトブキシティを回っていると、ピエロの姿をした人を見かけた。そのピエロはリンの姿を見かけると駆け寄ってきた。

「こんにちは！」

「こ、こんにちは…。」

「今ポケモンウォッチ、略してポケッチの無料配布券を配ってるんだ。」

「ポケッチ…？」

リンは首を傾げた。

「まさかポケッチを知らないのかい！？」

「え、あ、はい。」

「なら僕が説明しよう！ポケッチというのは…。」

リンはそのピエロに長々と説明された。

「…というものなんだ！スゴいだろう！」

「は、はあ。」

リンはそのピエロのテンションに押され気味だ。

「そんなキミに問題だ!…と思ったんだけど、めんどくさいからもうこれをあげるよ!」

「何ですか?これ。」

リンは三枚のチケットをもらった。それぞれ絵が違う。

「このチケットをポケッチカンパニーの前にいるおじさんに見せるとポケッチがもらえるよ!では僕はこの辺で、さよーならー。」

と言ってピエロは元の場所に戻った。

変な人だなーと思いながら標識に沿ってポケッチカンパニーに向かった。

「こんにちは。あの、このチケットを見せたらポケッチがもらえると聞いたんですが…。」

「はい、チケットを拝見します。」

「はい。」

リンは愛想の良さそうな男性にチケットを渡した。

「一、二、三枚!確かに三枚ですね!あなたにはこのピンクのポケッチを差し上げましょう!」

「ありがとうございます!」

リンはポケッチを受け取り、早速腕に着けた。ピンクが中心の服にピンクのポケッチはよく似合った。

「ではまたどこかで！」

そう言っつてそのおじさんは後ろのビルに入っつていった。

ポケッチを手に入れたリンはまだ日が高いことを確認し、204番道路へメティスを育てるために向かった。

すると、前の方に見慣れた人物が二人、変な服を着た人物が二人言い争いをしていた。メティスを育てようと思っつていたので、メティスはテトテトとっついてきていた。

「ラ…ラル…。」

急にメティスが怯えたように立ちすくむ。一緒に歩いていたスイウも驚いたようだった。

「どうしたの？メティス。」

リンが怯えるメティスを抱えようとしゃがんだ瞬間、リンの方に声が飛んできた。

「兄貴！あのラルトス、取り逃したやつじゃないですか！？」

「本当じゃねえか。ねーちゃん、そのラルトス渡せえや。」

直感で悪い人だと感じ取つたリンはメティスを抱え、睨みつけて言つた。

「あなたたちみたいなのに誰が渡すものですか！それに、メテイスは私の大事なパートナーよ！」

「おいおい。そこのじいさんもあそこのねーちゃんもさっさと渡せば怪我をせずに済むんだぜ？」

「誰が渡すものか！」

と見慣れた人物のうちの一人…ナナカマド博士が言った。ナナカマド博士の前に立ち塞がっているのはコウキだ。

「全く…こうなったら力づくで。行くぞ！」

「了解です！兄貴！」

「行け！ズバット！」

その変な服の人たちはズバットを繰り返した。リンはコウキとアイコンタクトを交わし、コクンと頷いた。

「行つて！スイウ！」

「行くんだ！ヒコザル！」

リンとコウキは同時に叫んだ。スイウは真っ直ぐ飛びだし、ヒコザルはボールから飛び出してきた。

「ゴロゴロッ！」

「ヒッヒッ！」

スイウもヒコザルもあの変な人たちが許せないようだ。

「ヒコザル！火の粉！」

「スイウ！冷凍ビーム！」

「ヒーコ！」

「ゴロゴロツ！」

ズバットたちは避けるヒマもなく、火の粉に直撃し、ふらついたところスイウの冷凍ビームが当たった。一撃でズバットたちは目を回した。

「ちっ使えないやつらだ。」

その変な人の一人がズバットを蹴り上げた。

「何てことを！あなたたちは一体何！？それにどうしてそんなことをするの！？」

「俺たちは悪の組織ギンガ団。ポケモンはただの道具。それだけだ。」

ギンガ団の男は冷たく言い放った。

「違うわ！ポケモンは友達よ！家族よ！パートナーよ！」

「ふんっくだらない。そんなもの必要ない。帰るぞ。」

「はい、兄貴！」

ギンガ団の男たちは去っていった。ズバットたちのそばには壊れたモンスターボールがあった。そのズバットたちを逃がした証拠だった。

「リン、ありがとう。」

ヒコザルにありがとうと言ってボールに戻したコウキが言った。

メティスはまだ震えていた。

「ううん。いいの。あのね、この子はメティス。マサゴタウンの近くでキズだらけのこの子をスイウが見つけたの。きつとさっきのギンガ団っていう人たちに襲われたのね。可哀想に。こんなに怯えて

」

そうやってリンはメティスの頭を撫でた。

「おそらく、進化のエネルギーがどのようなものか知りたかったのだろう。それと、ポケモン自身のエネルギーも。特にラルトスの進化形のサーナイトは“主を守るためならサイコパワーを使いきり、小さなブラックホールを作り出す”と言われておる。その力がいかほどのものを試すために捕まえたのだろう。リン、何かあればすぐに連絡するんだ。私に力になれることがあれば力になるう。」

「ありがとうございます。ナナカマド博士。」

「うむ。ではコウキ、戻るぞ。」

「はい、博士。リン、またね。」

「うん。」

リンは力なく答えた。すぐにナナカマド博士とコウキの姿が見えなくなった。

「スイウ、メティス、今日はもう戻ろうか。」

「ゴロ…。」

「ラル…。」

リンはメティスをボールに戻さずにポケモンセンターの宿泊する部屋に戻った。

「メティス…可哀想に…あんなことをする人がいるなんて…信じられない…。」

「ラ…ラル…。」

メティスは頭をリンに擦りつけた。

「私、絶対あの人たちを許さない。他にもギンガ団っていると思うけど。メティス、あなたのことは私が絶対を守るから。」

「ラルラル。」

メティスはありがとう、と言いたげに頭を再びリンに擦りつけた。

初めてのゲットと事故【後編】（後書き）

リン・コウキ・ジュン

うららさん！（うらら）

はい…。

反省しております…。
では、また次回…。

リン・コウキ・ジュン

はっ！

初めてのダブルバトル（前書き）

今回はちょっと短めですー。

リン

うららさん、もしかしてめんどくさくなっちゃったんですか？

ううん。

違うよー。

やっぱり、毎回長いかな？って思うようになったんだよね。

リン

そうなんですか？

はい。

意外と。

では

「初めてのダブルバトル」
のスタートです

初めてのダブルバトル

ポケモンセンターに戻ったリンは、気をとり直してスイウとメティスに言った。

「今日はここに泊まって、明日出発ね。そうだ。メティスにボール・ド・アイスを見せてあげるわ。」

「ラル?」

なあに?それ、と言いたげにメティスは首を傾げた。

「とりあえず裏庭に行きましょう。見せてあげる。」

そう言ってリンは外へ出て、裏庭に向かった。周りには何人かトレーナーがいた。

「スイウ、アイス・ド・ボール!」

「ゴーローツ!」

スイウは自分の回りに氷の膜を作った。周りから歓声が沸いた。

「でももう一ひねり欲しいのよねー。」

とリンが考え始めると、メティスがレポートをしてアイス・ド・ボールの中に入った。

「メティス?何するの?」

「ラルラル。」

メテイスはリンの方をチラリと向いてから、アイス・ド・ボールの中で手を合わせた。ポウツとメテイスが明るく光った。

「ラルラルー。」

その光がメテイスが手を上に上げたと同時に弾けた。その光がアイス・ド・ボールの中で輝き、とても綺麗だった。

「メテイスすごい！ね、スイウ！」

「ゴロツ！」

リンの足下にはメテイスのテレポートで外に出されたスイウがいた。メテイスはテレポートで外に出てきた。

「メテイス、あなたってすごい！おまじない使ったの？」

「ラル。」

メテイスは嬉しそうに笑った。アイス・ド・ボールは未だにキラキラ輝いていた。と、そのとき、誰かがリンに近づいてきた。

「あの、すみません。」

「はい？」

リンが後ろを向くと、爽やか系のイケメンがいた。

「何でしょう?」

「俺とバトルしてくれませんか?」

「バトルですか? いいですけど、旅を始めたばかりなので二匹しかポケモン持ってないですよ?」

「俺もまだ三匹しか持ってません。2対2のダブルバトルでどうですか?」

「いいですよ。」

バトルの申し込みを受け入れ、バトルフィールドの定位置についたリンとイケメン。

「あなたの名前は?」

と遠くからイケメンが聞いてきた。

「リンです。あなたは?」

「俺はヤマトです。」

周りにいたトレーナーたちの中から、一人が審判をかって出た。

「これからリンVSヤマトの2対2のダブルバトルを行います!」

「手加減はしませんよ! ヤマトさん!」

「俺も手加減はしません！」

「行くのよ！スイウ！メテイス！」

「ゴロゴローツ！」

「ラルー。」

「行け！ゼニガメ！ガーディ！」

「ゼニゼニー！」

「ガウ！」

ボールから水色のカメのようなポケモンと、赤い犬のようなポケモンが飛び出してきた。

「ゼニガメとガーディだあ！可愛い！」

「ミスゴロウとラルトスか。」

そう言ってリンとヤマトは同時にポケモン図鑑を取り出した。

「「えっ!?!」」

「ヤマトさん、ポケモン図鑑持ってるんですか!?!」

「リンさん、ポケモン図鑑持ってるんですか!?!」

びっくりしたように二人が言う。

「…まあ後にしましょう。リンさん、行きますよ！ゼニガメ！ミズゴロウに水鉄砲！ガーディ！ラルトスに火炎放射！」

「ゼーニガー！」

「ガーディー！」

ゼニガメが水鉄砲が発射し、ガーディが火炎放射を発射した。勢いから見て、だいぶ育ててあるようだ。

「スイウ！メティスの前に立ってハイドロポンプ！水鉄砲と火炎放射を打ち消すのよ！メティス！影分身してレポート！影分身をフィールドにばらまくのよ！」

「ゴローツ！」

「ラルー。」

指示通りスイウはメティスの前に立ち、水鉄砲と火炎放射を打ち消した。その際にメティスは影分身で分身を作り、それらをレポートしてばらまいた。

無数のメティスの分身がフィールドの現れた。

「くっ…ゼニガメ！殻にこもって回りながら水鉄砲だ！ガーディは守るだ！」

「ゼーニガー！」

「ガウ！」

ゼニガメが殻にこもり、四方八方に水鉄砲を発射した。次々とメテイスの分身が消えていく。ガーディは守るで水鉄砲を防いでいる。

「なかなかやるわね。ただ、これはどうかしら。メテイス！スイウの上に乗って、念力で水鉄砲の軌道を変えてゼニガメに水鉄砲をぶつけて！スイウは地震よ！」

「地震だつて!?!」

「そうよ。」

リンはニヤリと笑った。

「ゴーローツ！」

「ラルラル。」

スイウは器用にメテイスを乗せたまま飛び上がり、地震を起こした。メテイスは念力を使い、全ての水鉄砲の軌道を変え、ゼニガメにぶつけた。ゼニガメの動きが止まったところで、スイウの地震が直撃した。

「ゼ…ゼニ…。」

ゼニガメは目を回して倒れた。

「ぜっぜニガメ！」

「ゼニガメ、戦闘不能！」

「くっ戻れ！ゼニガメ！ありがとうな。」

ヤマトはそう言ってゼニガメを戻した。

「ガーディ！ラルトスに噛みつくだ！」

「ガウ！」

ガーディは走ってメティスに向かってきた。結構なスピードだ。

「スイウ！メティスごと守る！その間メティスは守るの中で影分身
！」

「ゴロツ！」

「ラルー。」

スイウはメティスの前に立ちはだかり守るをし、メティスは守るの
中で影分身をして分身を作った。

「そんなバカな！なんて守るの大きさだ！」

「まだまだです！メティス！レポートで分身ごと外に出て念力！」

「ラルツ。」

メティスは分身でガーディを囲み、念力を放った。

たくさんの分身に驚いていたガーディは直に念力を受けた。

「ガ…ガウ…。」

「ガーディ、戦闘不能！よって勝者はリン！」

「やったあ！スイウ！メティス！勝ったよお！」

「ゴロゴロッ」

「ラルー」

「二匹ともご機嫌だ。」

「リンさん、強いね。」

ガーディを戻してリンに近づいてきたヤマトが言った。

「ありがとうございます。ヤマトさんもお強いですよ。」

「ありがとうございます。…ところで、どうしてポケモン図鑑を？」

「私、ナナカマド博士からポケモン図鑑をもらったんです。旅をしつつ、ポケモンのデータを集めるために。」

「そうなのか。俺はオダマキ博士にもらったんだ。おじさんなんだ。オダマキ博士は。」

「そうなんですか？」

「ああ。ところで、電話番号を交換しないか？またバトルしたいしな。」

とヤマトは青色のポケギアを取り出して言った。ちなみにリンもポケギアを持っていて、色はピンクである。

「どつやって電話番号の交換をするんですか？私、どついうのには弱くて…。」

リンはへへへと笑った。

「ここをどつして、どつすれば電話番号が表示される。そしてこの状態からここを押すと、交換しますか？と出てくる。わかった？」

「はい。ありがとうございます。では早速。」

リンはヤマトをポケギアに登録した。

「またバトルしましょうね。」

「ああ。ところで、今から昼を食べようと思っているんだけど、一緒にどうかな？」

「ええ。いいですよ。その前にポケモンたちを回復しようと思うのですが。」

「俺もそのつもりです。行きましょう。」

「ええ。」

それからリンはヤマトと共にポケモンセンターでポケモンたちを回復させ、コトブキの中のあるカフェで昼食をとった。話しているう

ちに、同じ年だということがわかり、タメ口になった。お互いを呼び捨てにするまでになった。

「そう言えばさ、ヤマトの持ってるポケモンはゼニガメ、ガーディ、あと一匹は何なの？」

「ん？ああ、見せてやろう。出てこい、メリープ。」

「メリープ！」

「メリープだあ！可愛い！あれ…？この子はメスなんだ。」

「ああ。メスのメロメロボディが来たら困るだろ？それに、家にて仲が良かったからな。こいつも連れて来たんだ。」

「メリープ！」

メリープはヤマトに顔を擦りつけた。

「リンのミスゴロウ…スイウ、だっけ？だいぶ育ててあるんだろ？俺のゼニガメがやられたからな。」

「まあね。この子は私の最愛のパートナーなの。もちろんメティスも私の大事なパートナーだけだね。」

「ゴゴゴロツ」

スイウは得意げに言った。メティスが入ったモンスターボールがカタカタと揺れている。メティスも嬉しいようだ。

「ヤマト、あなたは次、どこに行くつもり？私はクロガネなの。」

「俺はソノオに行くつもり。クロガネのバッジはもう手に入れたからな。リンのスイウならすぐに余裕だよ。」

「そうなんだけどね。私はメティスで行こうと思ってる。メティスにもバトルをもっと経験してもらいたいし。」

「そうか。頑張れよ。」

それから二人と一匹^{スイウ}はポケセンに戻り、そのまま別れた。

初めてのダブルバトル（後書き）

リン

メテイス…。

可哀想に…。

うらら さん！

どうしてあんな設定にしたんですか！？

えっ…それは…その…。

リン

まさかそっちの方が面白いからとかそんな理由じゃないですよね！

？（怒）

ギックウ！

ちっ違うもん！

じっ次回は

「ジム戦！vsヒョウタ！」【前編】です！

お楽しみにー！
では！

リン

あ…逃げた。

ジム戦！vsヒョウタ！【前編】（前書き）

みんなー！

旅行のお土産だよー！

リン

うらら さん…立ち直り早いですね…。

コウキ

それにしても、どうして昨日投稿してくれなかったんですか？

そっそれは…その…（焦）

ジュン

弱冠流行遅れのドラ エを夢中になってたんだよな！

うらら ！

はう！

ちっちが！

でっでは、

「ジム戦！vsヒョウタ！」【前編】
の始まりです！

では私は…

リン、コウキ、ジュン

逃げた…。

ジム戦！vsヒョウタ！【前編】

ヤマトと別れたあと、リンは自分の顔が少し赤いことに気がついた。

「あれ？私どうして顔が赤いんだろう？ねえスイウ、どうしてだろう？？」

「ゴロゴロ？」

スイウは首を傾げた。

「よくわかんないよね。そうだ、メティス、出てきて。」

「ラルッ？」

ボールから出てきたメティスは首を傾げた。

「明日はクロガネに向かうわよ。それで、ジム戦の予約をして…今回はメティスに頑張ってもらうからね。」

「ラルッ。」

メティスはコクンと頷いた。

「スイウは、もしメティスに何かあったときの為の補佐役ね。」

「ゴロゴロッ。」

「よし、じゃあ晩ご飯を食べに食堂に行こうか。スイウ、メティス、

行くよ。」

「ゴロゴロッ！」

「ラルー。」

リンはスイウとメティスを抱え、食堂に向かった。食堂でご飯を食べ、シャワーを浴び、バトルの疲れが残っていたのか、そのままリンと二匹は眠った。

翌日の朝、朝食を食べたリンはスイウをボールに入れ、メティスを抱えてクロガネへ歩き始めた。

何人がトレーナーがいて、メティス一匹で全員に勝ち抜き、難なく荒れた抜け道にたどり着いた。

「暗いねえ。」

「ラルー。」

「おい！そこのお嬢ちゃん！」

「えっ？私？」

リンは突然山男に話しかけられた。メティスが怯えていないところを見ると、この山男はギンガ団関係ではないようだ。

「お嬢ちゃんにこれをあげよう！」

「何ですか？これ。」

「それは岩砕きの秘伝マシンだ。そいつの使い方は普通の技マシンと一緒にだが、技マシンとは違って何度も使えるんだ。ただし、そいつを使うにはクロガネジムが必要だがな。ワッハッハ！」

「…そ、そうなんですか。ありがとうございます。」

「おう！じゃあまた会おう！お嬢ちゃん！」

そんな出会いもあり、ようやくクロガネシティに着いたリンは、ポケモンセンターで昼食をとり、クロガネジムへ向かった。

「すいませーん！ジム戦の予約をしたいんですけどー！」

「はいはい！」

奥の方から女性が出てきた。

「ジム戦の予約ね。トレーナーカードを見せて下さい。」

「はい。」

リンは女性にトレーナーカードを渡した。その女性はトレーナーカードを見ながらパソコンに入力し始めた。

「フタバタウンのリンさんですね？確かに承りました。今日はジムリーダーがいないので、明日のお昼に来てください。」

「はい！」

ジム戦の予約をしたリンは207番道路でメティスを鍛えることにした。

「メティス！念力！」

「ラルー。」

「リ……リキー……。」

只今VS野生のワンリキーである。

「よし！絶好調ね！メティス！」

「ラルー」

「じゃあ、今日はこの辺で終わろうか。晩ご飯食べに行こうね。」

「ラルツ。」

リンはメティスを連れてポケセンへ戻った。ポケセンで晩ご飯を食べたリンはシャワーを浴び、部屋に戻った。

「メティス、おいで。」

「ラル？」

リンは膝の上にメティスを乗せると、ブラッシングを始めた。

「ラルー」

「気持ちいいでしょ？」

「ラルッ。」

メティスはコクンと頷いた。

「明日は頑張つてね。よし、これでオツケー。次はスイウよ。スイウ、おいで。」

メティスをベッドにおろしたリンはスイウを呼んだ。

「ゴロゴロッ。」

スイウは慣れた様子でリンの膝の上に乗った。

「はいはい。スイウはこれ、好きだもんね。」

「ゴロゴロッ。」

スイウのブラッシングを終えたリンは電気を消し、眠りについた。

翌日の朝、リンが目を覚ますとスイウとメティスの姿がなかった。

「あれ？二人ともどこに行ったんだろ？」

眠たい目を擦りながらリンが二匹を探していると、ポケセンの裏のバトルフィールドに二匹のポケモンの姿があった。

「あれ…？スイウとメティス、何してるのかな…？」

じーっとリンが見てみると、なんとスイウの水鉄砲をメティスが念力で弾く練習をしていたのだった。

「スイウ！メティス！」

「ゴロツ！？」

「ラルツ？」

リンが二匹を呼ぶと、びっくりしたような顔をしていた。

「二人とも…私のために…ありがとう…。」

「ゴロゴロー。」

「ラルラー。」

うずくまって泣き出したリンを二匹がポンポンと前足と手で撫でる。

「今日のジム戦、頑張ろうね！」

「ゴロゴロツ！」

「ラルツ。」

二匹が元気よく返事をしたところで、朝ご飯を食べに行つた。お昼までは買い物をし、お昼を食べてからジムに挑んだ。

「こんにちは！ジム戦を予約していた者ですが！」

「はいはい。リンさんね？こちらへどうぞ。」

「はい。」

そう答えながらリンはそつとメティスのモンスターボールに触れた。ボールは少しだけカタカタと揺れた。

「やあ！待ってたよ！君がフタバタウンのリンちゃんだね？僕はクロガネシティジムリーダーのヒョウタ。」

リンがフィールドに着くやいなや、いきなり赤いヘルメットの男性が自己紹介をした。

「これより、ジムリーダー、ヒョウタ対フタバタウンのナナセリンのバトルを行います！使用ポケモンは二体のシングルバトルです！また、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ許されます！」

「君の実力を見せてくれ！いくぞ！イワーク！」

「イワーク！」

大きなポケモンがボールから飛び出してきた。

「行くのよ！メティス！」

リンは迷わずメティスのボールを投げた。

「ラルー。」

声は相変わらず大人しいが、今日は何となく緊張しているのがわか

る。

「先攻は譲るよ。」

「ありがとうございます。メティス！影分身で分身を作って！」

「ラルッ。」

メティスはその場で影分身をした。あっという間にイワークはメティスの分身に囲まれた。

「イワーク！嫌な音で分身を消すんだ！」

「イワー！」

「メティス！鳴き声で応戦して！」

「ラルッ！」

メティスの分身も一斉に鳴き声を出し、嫌な音はかき消された。

「くっ！イワーク！岩落とし！」

「遅いです！メティス！念力！」

イワークが岩落としの体制に入る前にメティスに指示を出す。

「ラルッ。」

「イワー…。」

メティスの分身が一斉に避けたと思ったら、イワークが目を回して倒れた。

「イワーク、戦闘不能！」

「戻れ！イワーク！よく頑張ったな。次はこいつだ！行け！ズガイドス！」

「ズガイドスかあ。」

リンはズガイドスにポケモン図鑑を向ける。

「なかなか手強い相手ね。メティス、大丈夫？」

「ラルツ。」

メティスは頷きながら答えた。

「わかったわ。あなたに任せる。ただし、無理は禁物よ？」

「ラルツ。」

メティスは構えながら答えた。

ジム戦！vsヒョウタ！【前編】（後書き）

リン

うらら さーん！

お土産って何なんですかー！？

あっ！

忘れてたあ！

あのね、リンには…。

コウキ、ジュン

隙ありい！

えっ！？ちよっ！いやあ！

ジュン

これでオツケーだ。

ちよいきつめのグルグル巻きにしたからな。

????????

それあたしたち（俺たち）のセリフー！

誰^だ？
リン・コウキ・ジュン

あっ！

まだ二人とも出てきちゃダメえ！

ブチン！

リン・コウキ・ジュン
あの縄を切った…。

?????..?????

うらら (さん)！

私たち(俺たち)を早く出^{して}(せ)！！

まだダメなの！

ほら！早く帰らないとハイドロカノンぶつけるよ！

?????..?????

ごめんなさい！！

ふう…。

やっと帰った…。

さてと、これがリンの分で、これがコウキ。んで、これがジュンの分。

あれ？

どうしたの？三人とも。

ぼーっとしちゃってさ。

リン・コウキ・ジュン
な…なんでもありません…。

ふーん？

まあいいや。

リン、次回予告よろしく。

リン

は…はい！

次回は

「ジム戦！vsヒョウタ！」【後編】

です！

(つららさんって…何者…?)

ジム戦！VSヒョウウタ！「後編」(前書き)

>リン<

うららさん！

なあに？

>リン<

前回、「あの子」のこと、予告してませんでしたよね！？

だって…。

>リン<

だってじゃありません！

だってここまでいけるとは思わなかったんだもん。

>リン<

言い訳は後で聞きます！
では、

「ジム戦！VSヒョウウタ」 「後編」
のスタートです！

ジム戦！VSヒョウタ！「後編」

「メテイス！影分身しながらおまじない！」

「ラルッ。」

「同じ手には乗らないさ！ズガイドス！睨み付けるから頭突き！」

「ズガー！」

「ラ…ラル…。」

「メテイス！」

ズガイドスに睨まれたメテイスは足がすくんで動けなくなった。

「ズガー！」

その隙にズガイドスがどんどん迫ってくる。

「メテイス！念力で弾くのよ！」

「ラ…ラルッ！」

寸前のところでズガイドスの頭突きを念力で弾き飛ばした。

「ズガッ！」

弾き飛ばされたズガイドスは二本の足でしっかりと立ち上がった。

「（スイウの水鉄砲はあのズガイドスの頭突きよりも威力がある…スイウは本気で水鉄砲をしたから…うん。この勝負、いただきね。）メテイス！影分身から鳴き声！」

「ラルーッ！」

無数のメテイスの分身が一斉に鳴き声をした。先程もしたが、あれの数倍だ。

耳が割れそうなほどうるさい。

ズガイドスはその鳴き声の大きさにびっくりして、ひるんだ。

「今よ！メテイス！最大パワーで念力！」

「ラルーッ！」

無数のメテイスの分身が念力をした。念力はズガイドスに直撃した。

「ズ…ズガー…。」

「ズガイドス!?!」

「ズガイドス、戦闘不能！よって勝者、チャレンジャーリン！」

「やったあ！メテイス！私たち勝ったよあ！」

「ラルラルッ！」

控えめなメテイスも大きな声で喜んでいる。

「初めてだ…こんなにあっさり負けるのは…君のラルトスはとても鍛えられているんだね。うん。僕の負けだ。このコールバッジを受け取ってくれ。」

「はい！」

リンはヒョウタからコールバッジを受け取った。

「やったあ！メティス！ありがとう！あっスイウ！出てきて！」

「ゴロゴローツ！」

ボールから飛び出るやいなや、スイウはリンに飛びついた。

「君のもう一体のポケモンはミスゴロウだったのか！君には敵うわけもないな。コールバッジがあれば、秘伝技の岩砕きが使えるようになる。」

「ありがとうございます！今日のバトル、とっても楽しかったです！」

リンはヒョウタに頭を下げた。

「お礼を言うのは僕の方だよ。とても楽しいバトルができた。ありがとう、リンちゃん。」

「いえ。」

クログネジムから出たリンは、ポケギアをとりだし、誰かに電話をし始めた。

もしもし？

「もしもし？ママ？私！リン！」

あら、リン。どうしたの？

「あのね、クロガネジムのバッジをゲットしたの！」

まあ！すごいじゃない！

「うん！ヒョウタさん強かったけど、どうにか倒せたんだ！あつスイウ！待ってー！どこいくのー！？あつこらー！メテイスも行かないー！ごめんね、ママ、切るね！じゃあ！」

プツンとリンは電話を切り、スイウとメテイスを追って走っていった。

「はあ、はあ、はあ、はあ、スイウ、メテイス、どうしたの？」

スイウとメテイスはクロガネゲートの中に入っていく。その中では……。

「ムウー！」

「『ズバツ！』」

「ムウー！」

「『ズバツ！』」

ムウマとズバットの壮絶な追いかけっこが繰り広げられていた。

「こづいことね？」

「ゴロゴロッ。」

「ラルッ。」

二匹は同時に頷いた。

「スイウ！ズバットに冷凍ビーム！メティス！ムウマをテレポートで非難させて！」

「ゴーローッ！」

「ラルラルッ。」

スイウの冷凍ビームでズバットたちは瀕死に。ムウマはメティスのテレポートによってスイウの冷凍ビームに当たらなかった。

「ありがとな！お嬢ちゃん！」

「いえ。」

岩砕きの秘伝マシンをくれた岩男が話しかけてきた。

「何があっただんですか？」

「実はな、そのムウマが寝ていたズバットたちにちよっかいをか

けたんだ。」

「こらムウマ、あなたがいけないのよ？」

「ムウ…。」

ムウマはしょんぼりと下を向いた。

「じゃあ、自分のおうちに帰りなさい。これからは寝ているポケモンにイタズラしちゃダメよ？」

「ムウ…。」

「なら私はここで帰ります。おじさん、ムウマがちゃんと帰るまで見守っていてくださいますか？」

「もちろんだ。ほらムウマ、家に帰るんだ。」

「ムウ…。」

ムウマはクロガネシティに戻るリンをじーっと見た。リンがクロガネゲートから出ると、岩男に必死に何かを言って去っていった。

「スイウもメティスも敏感なのね。助けて欲しいポケモンたちの声が聞こえるみたい。」

「ゴロゴロー」

「ラルー」

「二匹とも得意げに言う。

「さてと。今日は晩ごはんは外で食べようか？バツジゲット記念だよー」

「ゴロゴロッ！」

「ラルラルッ。」

リンは二匹を連れ、クロガネシティ内のファミレスに向かい、そこでご飯を食べた。

翌日、リンは荷物をまとめ、クロガネゲートに向かった。

「スイウ！水鉄砲！」

「ゴローッ！」

「イ…イッシー…。」

「よし！スイウ！完ぺき！」

「ゴロゴロッ」

野生のイシツブテを一撃で倒したあと、リンは背中を何かにツンツンとされた。

「あれ？なあに？スイウ。」

リンは後ろを向いたが、そこには誰もいない。

「ゴロゴロ?」

ふと声のする方を向くと、スイウはリンの隣にいた。

「あれ?今のは何?」

首を傾げて前を向くと、何かの顔があった。

「ムウ!」

「い…い…いやあああ!」

リンの叫び声が荒れた抜け道中に響き渡った。

「ゴロツ!?!」

「ムウ?」

ボタンと倒れたリンをスイウとムウマが心配する。

「ムウ、ムウムウ、ムウマ!」

「ゴロツ!ゴローツ!」

スイウが水鉄砲をリンの顔にかける。もちろん、かなり手加減している。

「ハッ!あれは一体?」

「ムウ！」

「ムウマ！？もしかしてあなたは昨日のムウマ！？」

「ムウ！」

ムウマは嬉しそうに答えた。そのとき、岩男がリンに近づいてきた。

「お嬢ちゃん、そのムウマを連れていってみる気はないかい？」

「はい？私が？ムウマを？」

「おう。ムウマはお嬢ちゃんと一緒に旅に行きたいようだ。」

「ムウ！ムウマ！」

ムウマはクルリと一回転して言った。

「ムウマ、本当に私と？」

「ムウマ！」

「うん。わかった。なら。」

リンはムウマにボールを手で当てた。ボールは二回揺れて静かになった。

「ムウマ、出てきて。」

「ムウマ！」

出てくるやいなや、ムウマはいきなりリンにちょっかいを出した。

「もう！ムウマやめて！そうだ。あなたの性格は…と。無邪気でイタズラが好き…と。で覚えてる技が、サイコウエーブ、驚かす、怪しい光、黒い眼差しね。」

「ムウ！」

「なら、あなたはメスだから…ミスチフ。英語でいたずらっ子という意味よ。よろしくね、ミスチフ。」

「ムウ！ムウムウ、ムウマ！」

ムウマ…ミスチフは嬉しそうにクルクルとリンの周りを回った。

ジム戦！VSピョウタ！「後編」(後書き)

>リン<

うすららさん！

やっと見つけましたよ！

いやあ！

もう見つかったの！？

>リン<

うすららさんって、ホント計画性ないですよね。

はう！

>リン<

それに、あーんなミスもするし？

うう。。

>リン<

極めつきに、予告忘れですよ？

ああ。

私、もうダメだ…。

このひと…キャラ変わってるし…。

>リン<

で、うすららさん！

はいい！

>リン<

次回予告の台本は？

こ…こ…こです…。

>リン<

ありがとう。

さて、気を取り直して、次回は、

「あれ…？メテイス…？」

です！

お楽しみに！

ああ…。

私はもうダメだ…。

あれ…？メテイス…？（前書き）

今回はめっちゃ長いです！

【リン】

どうしたんですか？

うらら さん。

心変わりでもしたんですか？

いやあ…。

書いてたら長くなっちゃっただけなんだけどねー。

【リン】

そうなんですか。

珍しいですね。

飽きやすいうらら さんがそんなことをするなんて。

褒め言葉じゃないよね…。

それ…。

【リン】

何言ってるんですか？

うらら さん。

当たり前じゃないですか。

この人！

鬼だ！

【リン】

何言ってるのかわかりませんよ、じつじつさん。

さて、

「あれ…？メテイス…？」

の始まりです！

あれ…？メテイス…？

クロガネジムのバッジを手にしたリンは、ミスチフという名のムウマを仲間にし、一旦コトブキシティに戻った。

「何か、昼間にゴーストタイプ連れてるのって変な感じ。」

クスクスとリンは笑いながら隣にいるミスチフに向かって言う。

「ムウ？」

ミスチフはよくわからないようだが、リンが笑っているので嬉しそうにしている。

まだ日は高い。

リンはそのまま荒れた抜け道を通り、ソノオタウンに向かうことにした。

岩砕きはスイウが覚えられると言ったが、スイウには覚えさせないことにした。代わりに途中でビツパを捕まえ、岩砕きを覚えさせた。

「ゴツゴツしてるね、ミスチフ。」

「ムウ？」

「そっか。特性浮遊だもんね。わかんないか。」

しばらく歩くと道を邪魔する岩が現れた。

「ビツパ！岩砕き！」

「ビツパ！ビーパツ！」

元気よく飛び出したビツパは自慢の前歯でその岩を砕いた。

「（…誰かに似てるな…ビツパって…）。まあいいや。戻って、ビツパ。ありがとう。」

無事に荒れた抜け道を抜けたリンは花の綺麗なソノオタウンに到着した。

「うわあ！綺麗！」

「ムウ！」

ミスチフもメスだからか、花がたくさん咲いているのを見るのは好きなようだ。リンはポケセンにチェックインし、ビツパを誰かのパソコンに預けた。

「綺麗だねーミスチフ。」

「ムウ！」

リンはミスチフと共に丘の上でくつろいでいる。

「そうだ。二人も出してあげよ。スイウ、メティス、出てきて。」

「ゴロゴロッ！」

「ラルー。」

「ムウ！」

二匹が出てくると、ミスチフは嬉しそうに遊び始めた。性格が真反対のメティスとミスチフは最初、馬が合わないのではないかと心配したが、今の二匹の様子を見ると関係ないようだ。そんなとき、誰かが丘を登ってやってきた。

「あれ？リン？」

その声に気づき振り返ると、なんと先にソノオに向かったヤマトであった。

「あれ？ヤマト、どうしたの？」

リンがそう言うと、ヤマトはリンの隣に座った。

「実はさ、変な格好をしたやつらの会話をたまたま聞いてしまって。その会話が、谷間の発電所の電力を盗むというものだったんだ。」

「それって…スゴく大変なことじゃない！」

「そうなんだ。そのことを町の人に知らせようと思って走ってたらリンがいたんだ。」

「そう。あのさ、ヤマト。私は町の人に知らせない方がいいと思うの。パニック起こしたら大変だし。それに今はポケモンコンテストソノオ大会の準備で大忙しだし…。」

「そうなんだよなー。そこが悩みどころなんだよ。そうだ、リン、少しだけ付き合ってくれ。ソノオの中の花畑に行きたいんだ。その変な格好のやつらは花畑に行くと言っていたからな。」

「いいよ。あっそうだ、紹介するね。この子はムウマのミスチフ。クロガネゲートで仲間になったの。」

「ムウ！」

「ムウマか。昼間に見るのは変な感じだな。」

ヤマトはミスチフの頭を撫でながら言った。

「わかるわかる。そうだ、花畑に急ごう？あそこのおじさんにポケモンセンターで甘い蜜もらったの。何かあったらいけないし。」

そう言ってリンは立ち上がった。

「そうだな。」

ヤマトも立ち上がった。

「みんな、戻って。」

リンはスイウ、メティス、ミスチフをボールに戻し、花畑へと急いだ。

「おいおっさん！甘い蜜をよこせ！」

「嫌だ！」

花畑では変な格好の人二人とおじさんが言い争いをしていた。メテイスのボールがカタカタと動き始めた。

「ギンガ団……。」

「ギンガ団？リン、ギンガ団なんて知ってるのか？」

「知ってるもなにも、私はこいつらを許さない。あなたたち！やめなさい！」

その声に気づいたギンガ団の二人は振り返った。

「なんだよ。やるってのか？」

ギンガ団の男はボールを持って言った。それを合図にもう一人の男もボールを手に持つ。

リンとヤマトは目を合わせ、同時に頷いた。

「かかってこいよ。」

ヤマトは挑発する。するとギンガ団たちはすぐに乗ってきた。

「なんだとー！？ギタギタにしてやる！行け！ズバット！」

「こつちもだ！行け！ズバット！」

「ズバット！」

「お願い！ミスチフ！」

「行くんだ！メリープ！」

「ムウ！」

「メリー。」

ミスチフはやる気満々だ。メリープは落ち着いてはいるが、体を時折電気が走る。興奮している証拠だ。

「ミスチフ！怪しい光！」

「メリープ！充電！」

「ムウ…。」

「メリー！」

ミスチフは見るからに怪しい光でズバット二体を混乱させ、その隙にメリープは充電をした。

「おいズバット！しっかりしろ！翼で打つだ！」

「お前も翼で打つだ！」

「ズバット！」

ズバットたちは怪しい光を振り切り、翼で打つを繰り返してきた。

「遅い！ミスチフ！サイコウエーブ！」

「メリープ！電気ショック！」

「ムウマー！」

「メリー！」

ミスチフのサイコウエーブとメリープの電気ショックで一発で瀕死に。

「全く使えないやつらだ。」

そう言つてギンガ団の二人はモンスターボールを地面に叩きつけた。

「なぜ逃がすんだ！」

その光景を目にしたヤマトは憤慨した。

「使えないからだ。それ以外に理由はない。仕方ない。逃げるぞ！」

「おう！」

ギンガ団の二人はそそくさと逃げていった。そのとき、リンの足元に何かが落ちた。

「ムウ？」

ミスチフがそれを拾った。

「ムウ。」

「ありがとう、ミスチフ。これって…鍵？」

「ありがとう、お嬢さん、お坊ちゃん。おや？それは谷間の発電所の鍵じゃないか。どうしてそれをあいつらが？」

「…ヤマト！」

ハツとしたようにリンが言った。

「そういうことか！おじさん、失礼します！」

「おっおい！待ってくれ！」

「何ですか？」

リンが聞いた。

「君たちが悪い人だとは思わない。だが、君たちが何をしようとしているのかは教えてくれ。」

おじさんは真剣な顔で聞いた。

「わかりました。実は、今のひとたちはギンガ団という悪の組織です。そのギンガ団が今谷間の発電所で電気を盗んでいます。私たちはそれを阻止したいのです。」

「それは君たちがすべきことなのか？この町の人に任せればいいじゃないか。」

「もうすぐポケモンコンテストソノオ大会が行われます。そんなことが本部に知られたらソノオ大会は中止になりますよ?」

「……………」

おじさんは押し黙った。

「任せて下さい。それに、私はあいつらを許せないんです。この子も…。」

そう言っつてリンは未だに揺れているメティスのボールに触れた。

「君たちのしたいことはわかった。私は念のため、ソノオの町長に伝えてくる。心配するな。騒ぎが収まるまで誰にも伝えないように手回ししておくからな。君たちはギンガ団を頼んだぞ。」

「「はい!」」

リンはミスチフを戻し、ヤマトと共に谷間の発電所に向かった。

「あれ?ヤマト、そこに女の子がいるんだけど?」

「ホントだな。しかも泣いてるな。」

「うん。私、話しかけてみる。」

リンは女の子に近づき、話しかけた。

「ねえあなた、どうしたの?何で泣いてるの?」

リンがそう言うとその女の子は顔を上げた。

「グスツ…グスツ…パパが…グスツ…パパがその発電所で…グスツ…無理やり働かされてるの…グスツ…」

「ヤマト、この子のパパ、谷間の発電所で無理やり働かされてるんだって。」

「そうか。わかった。君も来るかい？俺たち、今谷間の発電所に向かってるところなんだ。道わからないし、案内してくれると助かるんだけど。」

「パッ…パパを助けてくれる…？」

「もちろん。案内してくれるかい？」

ヤマトをそう言うと、その女の子はコクンと頷き、案内してくれた。その女の子の名前はウヅキというらしい。ウヅキちゃんは慣れた足取りで谷間の発電所まで案内してくれた。

「ここだよ。でもね、鍵がかかって開かないの。」

「ヤマト、よろしく。」

「わかった。」

そう答えると、ヤマトはポケットから鍵を取りだし、ドアを開けた。

「何で鍵を持つてるの？」

とウツキちゃんがびっくりしたように言う。

「色々あってね。ウツキちゃん、行くよ。」

「…うん。」

リンとヤマトとウツキちゃんは谷間の発電所内に足を踏み入れた。途中でギンガ団のしたっぱに会い、侵入したことがバレた。何人ものしたっぱと戦った。その間ずっとミスチフが戦い、サイケ光線を新しく覚えた。

「リンさん、この奥にパパがいるはずなの。」

リンの手を握っているウツキちゃんが言ったと同時に、前の方から誰かが歩いてきた。

「あら。侵入者って誰かと思ったら。まだまだ新米のトレーナーじゃない。自己紹介をするわ。あたしはギンガ団3幹部…じゃなくて、4幹部のマーズ。こんなに弱そうなのにあたしのしたっぱたちは何してるのよ。」

そのマーズという人が出てきた瞬間、メティスのボールが今までにないくらい揺れた。今にもベルトから外れそうなほどに。

「何よ！あなたたちの方が何百倍も弱いわよ！」

リンは必死にメティスを落ち着かせながら言った。

「生意気な小娘ね。ならどっちが強いのか勝負つけようじゃない。」

とマーズがニヤリと笑いながら言った。

「望むところよ！」

リンはミスチフのボールを持って答えた。

「その強気はどこまで続くのかしら？行きなさい！ズバット！」

「ミスチフ！お願い！」

「ズバット！」

「ムウ！」

珍しくミスチフが怒っている。ポケモン同士はボールの中でも会話ができるらしく、メティスの怯えぐあいでも悟ったようだ。スイウのボールなど、カタカタと怒りで震えている。

「ミスチフ！サイケ光線！」

「ムウマー！」

マーズが指示を出す前にリンはミスチフに指示を出す。

「ズ…ズバ…。」

「使えないわね。戻りなさい。次は強いわよ。行きなさい！ブニヤット…！」

「ブニヤァー！」

「ブニヤットかぁ…。」

図鑑をブニヤットに向けると、ブニヤットの情報が表示される。

「ミスチフ！サイケ光線！」

「甘い！ブニヤット！猫騙し！」

「ブニヤァー！」

「ムウ！？」

猫騙しがヒット。猫騙しは悪タイプであり、ミスチフには効果は抜群だ。だが、ミスチフはギリギリで持ちこたえ、至近距離でサイケ光線をぶつけた。

「ム…ムウ…。」

ミスチフはフラフラしている。

「ミスチフ！ありがとう！戻って！次は…。」

リンはベルトを見た。相変わらずスイウのボールは怒りで震えている。メテイスは…？と思って見てみると、なんとメテイスは怯えてはいないが、怒ってもいた。

「（決めた！）メテイス！お願い！」

「ラルー！」

メティスは怯えと怒りで震えている。

「そんな震えてるラルトスであたしのブニヤットと戦うつもり？まあいいけど。ブニヤット！ひっかく！」

「ブニヤー！」

「メティス！影分身から願い事！」

「ラ…ラル…。」

実際にブニヤットが迫ってくると怖いらしく、足が動かない。

「メティス！」

「ラルー！」

メティスはブニヤットのひっかくで飛ばされた。

「メティス！」

「ラ…ラルツ。」

メティスは立ち上がった。そして影分身をした。

「ムダよ！ブニヤット！騙し討ち！」

「騙し討ち！？メティス！こっちに来て！」

「ラルツ！」

メテイスは数匹の分身と共にテレポートをしてやってきた。騙し討ちがあたる寸前にいい傷薬を与えた。

「ラルツ！」

騙し討ちでメテイスは飛ばされた。

「メテイス！そのままやられちゃっていいの！？あなたのお父さんとかお母さんはどうなるの！？助かったのはあなただけなのよ！？それに、そのブニャットにあなたのお父さんとお母さんは倒されてしまったんでしょ！？…ってあれ？何でそんなこと知ってるんだろ…？」

リンは考え始めた。なぜだか不意にそのことが頭に流れてきたのであった。

「ラ…ラルー！」

刹那、メテイスを真っ白な光が包んだ。

俗に言われる“進化の光”だ。

「メテイス…？」

「キルキル！」

メテイスはキルリアに進化した。そのとき、**凶鑑**がピロリンと音

を出した。

「メテイスが新しい技を…サイケ光線を覚えたのね。よし！メテイス！サイケ光線！」

「キールー！」

進化したメテイスのエスパー技にはさすがのブニヤットも耐えることができなかった。

「ブ…ブニヤ…。」

「ブニヤット！まったく、使えない。」

そう言つてマーズはボールを捨てようとしたが、奥から来た人物に邪魔された。

「やめるんじゃ、マーズ。そいつはまだ使える。逃がすんじゃない。そのズバットもだ。」

「何よ！ブルート！まだギンガ団に入って日が浅いくせに偉そうなの口きいてさ！」

「わしはただ意見を言ったまでだが？もう電気は十分すぎるほど手に入った。退散するぞ、マーズ。それに、おもしろいものも見たしな。」

ブルートと呼ばれた気持ち悪いおじいさんは、リンの方を向いてニヤリと笑った。そのとき、リンの頭の中に声が響いた。

「（この少女はポケモンの気持ちがわかるらしい。こいつは使えるかもしれない。）」

「（な…何なの…これ…？…どうしてこんなことがいきなり…？）」

そのとき、スイウのボールがカタカタと揺れ、同時に声が響いてきた。

「（あいつは悪いやつだ！私のご主人さまが！出たい出たい！私が守るんだ！）」

「（スイウ…？）」

リンはスイウのボールをとり、投げた。

「ゴロゴロッ！」

スイウの声は警戒心に満ち溢れていた。

「（スイウ姉ちゃん！うちは戦えないから姉ちゃん頑張つてよ！）」

といたずらっ子の声が聞こえた。

「（ミスチフ…。）」

「ちっ。お前たち！やっしておしまい！」

その声を合図に周りのギンガ団の下っ端たちがじりじりと歩みよってきた。

「（私にはどうやらポケモンに気持ちがわかるみたい…？よくわかんないんだけど。）」

「リン！俺も加勢する！」

ヤマトはボールを手に言う。

「うん。お願い。」

「行くんだ！ゼニガメ！ガーディ！」

「ゼニゼニー！」

「ガーディ！」

ギンガ団の下っ端たちはズバットやその他もろもろを繰り出した。それらを全て倒し、無事にウヅキちゃんやパパと再会することになった。

リンはその様子を複雑な心境で見つめていた。

いつもとは違うリンの表情に、ヤマトの心はトクンと揺れた。

「どうか…したのか？」

「ううん。何でもないの。」

リンは無理に笑う。

「（パパ…。）」

スイウも寂しそうだ。

「ウヅキちゃん、私たち、もう帰るね。」

「うん！リンさん、ヤマトさん、ありがとうございました。」

ウヅキちゃんはぺこりと頭を下げた。

「私からも礼を言います。ありがとうございました。」

「いえ。では。」

リンはスイウとメティスを、ヤマトはゼニガメとガーディを戻し、ソノオに戻った。

あれ…？メテイス…？（後書き）

【リン】

さあて、うらららさん。

説明してもらえますか？

それはっ！

じっ次回わかるから！

ね！

お願いだから笑いながら近づかないで！

いやあああ！

【リン】

さて、次回は、

「リンの告白」

の予定です…って、どういふことですか！

いやあああ！

ごめんなさいいいい！

リンの告白(前書き)

ふう〜。

久々の更新です…。

【リン】

今回遅かったですね、うららさん。

いろいろあつてね〜。

【リン】

うららさんが悩み事ですか!?

すい〜!

すいって…。

ひどくない?(泣)

【リン】

そうですか?

さし、

「リンの告白」

のスタートです!

私…もう…この人とやっていける気がしない…。

リンの告白

ポケセンに戻ったリンは、ご飯を食べずにずっと考えていた。そんなリンのことを心配して、スイウ、メティス、ミスチフは話している。

「ゴロゴロ…？（ご主人様…どうしたのかな…？今までこんなことなかったのに…。）」

とスイウが心配そうに言う。

「キル。キルキル。（私にはわからない。ただ、何かが違うの。雰囲気…というのかな？感じが違うの。）」

とメティスは目を瞑りながら言った。

「ムウムウ。ムウ…。（スイウ姉ちゃんも、メティス姉ちゃんも、よくご主人様のことわかってるんだね。うちはまだよくわかんない。」

ミスチフは少し寂しそうに言う。

「ゴロゴロ。（私は小さい頃からずっと一緒だから、よくわかるの。）」

「キルキル。（私、エスパークタイプだし。気持ちがよくわかるの。）」

スイウもメティスも少しだけ笑いながら言う。

「ムウ！ムウムウ！（スゴいね、スイウ姉ちゃん、メティス姉ちゃん！）」

とミスチフが無邪気に言う。

「ゴロ…。(ミスチフ…)」

「キル…。(ミスチフ…)」

はあ、と二匹は頭を抱えた。

当然、完全に“力”を開花させたリンにはその会話は全て聞こえている。そこでリンは、三匹に頭の中で話しかけてみることにした。

「(き…聞こえる…？三人とも…)」

「ゴロツ！？(えっ！?)」

「キルツ！？(えっ！?)」

「ムウツ！？(えっ！?)」

三匹はびっくりしたようにリンの方を向く。

「ゴ…ゴロ…？(ご…ご主人様…?)」

スイウが目を真ん丸にして聞く。

「(聞こえるならそのまま聞いて。今日のお昼、ギンガ団のマーズって人と戦ったじゃない?)」

そのとき、ピクンとメティスの体が反応した。が、そのまま静かに聞いていた。

「（その時にね、この映像が流れてきたの。送ってみるね。）」

リンはそのとき流れてきた映像を三匹に送った。壮絶な現場だった。その映像を見て、スイウとミスチフは啞然とし、メティスは怒りに身を震えさせた。

「キル…キルキル…。（私はもうあいつらを恐れない。ただ、許せないだけ。）」

そうメティスは一人言を言った。

「（私ね、どうやらポケモンの気持ちとか言葉とかその他色々わかるみたい。）」

そう三匹に言った瞬間、リンのポケギアが鳴り始めた。

「誰からだろ？もしもし？」

リン、俺だ。ヤマトだ。

「ヤマト？どうしたの？」

お前どうして夕食にも降りて来ないんだ？ジョーイさんが心配してたぞ？それに俺だって…。

「…ちょっと考え事してて。スイウたちにはポケモンフーズをあげ

るから大丈夫。いきなりだけど、ヤマト、今から私の部屋に来てくれない？203号室だから。」

スイウたちにはポケモンフーズ…って、トレーナーのお前が食べなくてどうする！？何か持っていくからな！じゃあ！

プツンと電話が切れた。

「切れちゃった。」

「ゴロゴロ。(珍しく声をあげていたようです) ヤマトさん。(」

「うん。そうだね。あっそうだ。夕食の時間逃しちゃったからさ、ポケモンフーズで勘弁してくれる?」

「ゴロツ。(はい)」

「キルツ。(はい)」

「ムウツ。(うん)」

その答えに少し微笑むと、リンはお皿にポケモンフーズをとりだした。

「どうぞ。」

「ゴロゴロツ。(いただきます)」

「キルツ。(いただきます)」

「ムウムウムマー！（いったただっきまーす！）」

三匹はパクパクと食べ始めた。しばらくすると、リンの部屋のドアがノックされた。

「どうぞ。」

リンがそう答えると、遠慮がちにドアが開かれた。

「リン…?」

「入ってきていいよ。ヤマト。」

「じゃ、じゃあ、お邪魔します…。」

ヤマトは手にコンビニの袋を持って入ってきた。

「はい、リン。」

「ありがとう。」

リンはヤマトが差し出したサンドイッチを食べ始めた。

「で、何かあるのか?」

「うん。あのね?私…。」

そこでリンは言葉を切った。

「（スイウ、メティス、ミスチフ、私のこと言うべきかな？）」

「ゴロゴロッ。（私が思うに、ヤマトさんは信用しても大丈夫だと思います。）」

「キルキル。（私もスイウ姉さんと同感です。）」

「ムウ！ムウムウ。（うちも大丈夫だと思う！だって心の底から主人様を心配してるんだよ？ヤマトさん。）」

何気に鋭いミスチフ。

「（うん。わかった。）ヤマト、実はね、私、ポケモンの気持ちとか言葉とかその他に色々なことがわかるみたいなの。」

リンはヤマトの方を向いて真剣に言った。

「それ…本当なのか…？」

ヤマトは目を真ん丸にして聞く。

「うん。私もこの事には今日のマーズとの戦いで気づいたの。自分でもびっくり。」

リンは笑いながら言う。

「…そうか…俺の予感はずしかったという訳か。」

とヤマトが一人納得したように言う。その言葉を最後に、ヤマトはうーんと考え始めた。

「ゴロツ！（やっぱり！）」

「キルツ！（やっぱり！）」

「ムウツ！（やっぱり！）」

とスイウ、メティス、ミスチフが声を揃えて叫んだ。

「えっ？何が？何がやっぱりなの？」

リンのみ状況を把握していない。

「ゴロゴロ？（じゃあ、あの言い伝えは本当なの…？）」

「キルキル。（かもしれません。）」

「ムウムウ。（もし言い伝えが本当なら、うちらって…って、あれ
？）」

ミスチフが何かに気がついたようだ。

「ムウ…。（もしかして…。）」

「キルキル？（言い伝えに出てくるトレーナーのパートナーたちと
種族が同じ、ということ？）」

「ねえ、スイウ、メティス、ミスチフ、言い伝えって何？」

さつきからずっと話を聞いていたリンが三匹に聞いた。

「ゴロゴロ…。(大昔、ネイティオ様が天に召される直前に、ある大きな予言を残されました。)」

「キルキル…。(その予言とは、“悪の者が時を司る神、空間を司る神を利用し、反転の世界の王に迫りしとき、一組の人間の男女が我らを救う。”)」

「ムウムウ…。(“女は我らと言葉を交わせ、男は生まれつき備わった未来と過去を感じる力で女を探しだす。また、その者たちに同伴している者は…。”)」

「ゴロツ。(私たち沼魚種族。)」

「キルツ。(私たち気持ち種族。)」

「ムウツ。(うちら夜泣き種族。)」

「ゴロゴロ。(その他に九つの種族があるのです。私は知りませんが。)」

スイウ、メティス、ミスチフから説明を受けていた、その刹那。

「リン！」

「なっ何!?!」

いきなり言葉を発したヤマトに、リンは心底驚く。

「俺と一緒に旅をしないか？」

「はっ!?!」

「だから、俺と一緒に旅をしないか、って言ってんだ。」

ヤマトの顔はいつになく真剣だ。

「何言ってるの!?! ヤマト!?!」

「もしギンガ団が言い伝えに出てくる悪の者だった場合、俺とリンは狙われるかもしれない。」

「どっどうしてヤマトは言い伝えのことを!?!」

リンには全く理解ができていない。

「俺はこの能力のお陰で過去のことも知ることができる。ゼニガメ、ガーディ、メリープの力を借りてこの言い伝えのを知ることができたんだ。」

「…ということは、残りの九つの種族のうち、三つの種族は、亀の子種族、子犬種族、綿毛種族…ってこと? でも何人かは進化すれば種族変わっちゃっし…。」

ああー! もうよくわかんない! そう言ってリンは頭を抱え、ベッドに顔を埋めた。

「まあ、考えてみてくれ。ただし、リンの力のがもしかしたらギンガ団に知られたかもしれない。今日、プルートとかいうじいさんが気味の悪い笑みを浮かべていたからな。それに、言い伝えと関

係なくてもリンの力があれば悪事を働くのには断然有利だしな。」

じゃあまた明日。と言ってヤマトは部屋を出ていった。

「ゴロゴロ…。(ご主人様は私たちが守る…絶対に…)」

スイウがそう呟いた瞬間、突然リンがこんなことを言った。

「(スイウ、メティス、ミスチフ、私思っただけど、その“ご主人様”っていうの、やめてくれない？それと、敬語も。)」

「ゴ…ゴロゴロ…。(で…でも…そういうわけには…)」

「キルキル。(そうです。スイウ姉さんの言う通りです。)」

何も言わないが、ミスチフも頷いている。

「(私が嫌なの！お願いだから、リンって普通に呼んで。それに、敬語もなしで。)」

リンは両手を合わせて懇願する。リンの頼みを断れず、三匹は澁々了解した。それからリンは散々迷った拳げ句、一つの結論を導きだした。

「ゴロゴロツ！(リン！もう朝だよ？起きて！)」

リンに対する言葉使いにだいぶ慣れたスイウが小さな体でリンを起こそうとしている。

「んーまだ寝るー…。」

しかし、当のリンは寝返りを打ってスイウに背を向ける。

「キルキルッ！（早く起きて！今日はヤマトさんに結論をだすんでしょ！？）」

半ば呆れ気味にメティスが口を挟む。

「あと30分……。」

メティスの言葉も無視し、布団を頭まで被る始末。

「ムウ……。 (リン……。)」

ミスチフでさえたため息をつく。

「ゴロゴロ……。ゴロ？ (しょうがない……実力行使するしか……。メティス、ミスチフ、準備はいい?)」

「キルッ。 (ええ。スイウ姉さん。)」

「ムウ (うん スイウ姉ちゃん。)」

スイウ、メティス、ミスチフは若干怪しい笑みを浮かべた。

「ゴローッ！（水鉄砲ー！）」

「キルッ！（念力！）」

「ムウーマー！（サイコウエーブ！）」

スイウの水鉄砲とミスチフのサイコウエーブが念力により一つにまとめられ、丸ごとリンにぶつけれた。もちろんかなり手加減しているが。

「いやあ！ちよつと！？何！？」

「ゴロゴロ…？（目が覚めた…？）」

突然のことに驚いて飛び起きたリンにスイウがため息混じりに言う。

「うん。でもあんまり寝た感じがない…。一時間ごとに起きてたからかなあ？」

「ゴロゴロ…。（やっぱり起きてたのね？）」

「気づいてたの？」

リンは不思議そうに言う。

「ゴロゴロツ？（私たちポケモンが主の変化に気がつかないとでも？）」

「キルキル。（リン、私たちをなめないで？）」

「ムウツ！（そうだよ！スイウ姉ちゃんとメティス姉ちゃんの話通りだよ！）」

三匹から説教じみたことを言われる。しかし、その言葉はリンの耳に入っていないようだった。

「ゴロゴロッ？（どうかしたの？）」「

「…私の出した結論は“あれ”でよかったのかな…って思ってた。」

「ムウッ。（リンが自分で出した結論なんだから、それでいいんでしょ。）」「

やはり鋭いミスチフ。不思議とその言葉はリンの心に響いた。（まあ、実際は頭の中に響いているのだが。）

「そっか。そうだねっ よし、着替えてご飯食べに行こっ！なんたって今日は待ちに待ったコンテストの日だし」

今日のためにママにドレス送ってもらったしーとか言いながらリンは服を着替え、食堂へ降りて行った。

「（今日は何にする？）」「

会話を周りの人に聞かせる訳にはいかないので、頭の中でも三匹に聞く。

「（私トースト）」「

「（私はホットサンド）」「

「（うちはホットケーキ！）」「

「（わかったわかった。）今日はサンドイッチにしよう。」

そう言つてリンはトースト、ホットサンド、ホットケーキ、サンドイッチの食券を購入した。

「どうぞー。」

「ありがとうございますっ。」

さすがに四人分（一人と三匹分？）になるとなかなか重たい。ふと軽くなったなと思つて周りを見渡すと、いつの間にかヤマトが二つあるうちの一つのお盆を持っていた。

「あっヤマト、ありがとうございます。 そうだ、そこに座つてもいい？」

「ああ。」

そこ、とはヤマトの席の真つ正面だ。

「ありがとう。」

リンは手に持っていたお盆を置き、椅子を二つ引いた。リンの隣にスイウが座り、スイウの隣にメティスが座つた。ミスチフは特性浮遊のため、椅子は関係ない。リンはお盆をヤマトから受け取り、それぞれが頼んだものをそれぞれの前に置いた。三匹は嬉しそうに食べ始めた。

「それで、結論は出たのか？」

サンドイッチを食べ始めたリンにヤマトが聞く。

「うん。…私、ヤマトと一緒に旅をする。」

「そうか。よかった。」

ヤマトは安心したように言った。

「そうそう、ヤマト、私今日コンテストに出るから。」

「コンテスト？リン、バッジもリボンも集めるのか？」

大変だぞ？とヤマトは言っでご飯を口に運んだ。

「わかってる。でもさ、少くらい大変な方が旅は楽しいじゃない？」

リンはそう無邪気に言う…が、急に何かを思い出したように固まった。

「どうした？」

目を見開いたまま動かないリンを心配して、ヤマトが声をかける。

「大変！ゆっくり食べてるヒマなんてないわ！ボールカプセルをセツトして、それに技の確認もしなきゃ！じゃあヤマト、お先！私は裏のバトルフィールドにいるから！」

リンは空になったお皿を下げ、さっさとバトルフィールドに向かった。

「さて、今日のコンテストの一次審査はメティス、二次審査はスイウ。今回はミスチフはお休みね？」

「ゴロゴロッ！（頑張る！）」

「キルキル。（スイウ姉さんに回せるように頑張る。）」

「ムウムムマー！（スイウ姉ちゃん！メティス姉ちゃん！頑張つてー！）」

「（まだ気が早いよ、ミスチフ。）よし、メティス戻つて。」

それからリンはヤマトが来るまで技の確認をした。

リンの告白（後書き）

【ヤマト】

どうしたんですか？うららさん。

元気ないですよ？

はあ…。

【ヤマト】

リンー！

うららさんが溜息なんかついてるぞー！？

いやあー！

リンを呼ばないでー！

【ヤマト】

嘘ですよ。

そ…その嘘は…シャレにならない…。

【ヤマト】

すみません。

ついつい。

あんたの本性が私にも掴めない…。

そうだ、ヤマト、リンのこゝろをじっくり…

【ヤマト】

リンのこと…ですか？

そうですね…よくわかりません。
俺の力でもなぜか未来が感じられませんし…。

そっか

それならそれでいいんだよっ
じゃあ、次回コールお願い！

【ヤマト】

はい！

今回は

「リンの初コンテスト」

です！

(うーらら さんって変な人だな…。)

リンの初コンテスト【前編】（前書き）

ふう…。

やっと投稿です…。

【リン】

最近ナエトル並ですよ。更新速度。

失礼な！

（まあ、ホントのことなんだけど…。）

【リン】

でも、待ちに待ってたコンテストバージョンだからいいです

珍しい…。

【リン】

お仕置きはコンテストバージョンが終わってからにします

ひどい！

やっぱりひどいよ！

この人！

【リン】

さて、

「リンの初コンテスト」【前編】
のスタートです！

（…ラグラージ連れて来ようかな…。）

リンの初コンテスト【前編】

ポケセンからコンテスト会場に向かったリンとヤマト。
たくさんのお客様が続々と入っていく。

「緊張するよー…。」

「ちゃんと練習したんだろ？ポケモンたちを信じて、力いっぱい出すんだ。大丈夫。リンならできるさ。」

「…うん。わかった。そうだ。この子をよろしく。コンテストを見せてあげたいし。」

そう言ってリンは腰からモンスターボールを取った。

「ミスチフだろ？わかってるよ。任せとけ。」

そう言ってヤマトはモンスターボールを受け取った。ヤマトの手中のモンスターボールがカタカタと揺れた。

「（リン…ヤダ…。）」

「（わがまま言わないのっ。それに、ミスチフだってコンテスト見たいでしょ？）」

「（そうだけどー…。）」

「（文句言わないのっ。）」

リンはそう頭の中で言いながらクスクスと笑う。
そんなリンを見て、ヤマトの頭の中にはクエスチョンマークが三つ
浮かぶ。

「どうした？ミスチフと話してるのか？」

「ええっ。ふふふっ。ミスチフね、あなたじゃヤダなんだって。ふ
ふふっ。」

リンがツボにハマったようにクスクスと笑う。

「ミスチフ…酷いな…。」

「(だって…)」

ミスチフが少し申し訳なさそうに言う。

「(ほら、謝って?)」

「(ごめんなさい。)」

ミスチフが素直に謝る。

「ごめんなさいって。許してあげて？」

「わかったわかった。許してやろう、ミスチフ。」

「(わーい!)」

ボールがカタカタと嬉しそうに揺れる。

「そういえば。リン、まだ行かなくていいのか？ドレスとか着ないのか？」

「そうだね。行ってくるっ。ミスチフをよろしく。」

「任せろ。リンはコンテストに集中しろよ？」

「わかってるっ。じゃあ、また後でっ。」

リンはコンテストの待合室へと向かった。
鞆の中からピンク色のドレスを取り出し、それを着た。髪はサイドで結び、シュシュでとめ、大きく巻いた。

「準備オツケー よし、スイウ、メティス、出てきて。」

「ゴロゴロッー！（わーい！）」

「キルキルッ。（うん。）」

リンの目の前にスイウとメティスが現れた。

「今日はとうとうコンテスト本番よ？今までの練習通りにすれば大丈夫だから。とは言っても、私も緊張してるんだけどね。」

「ゴロゴロ。（うん。わかるよ。私も少し緊張してる。）」

「キルキル。（私も緊張してる。ミスチフの分まで頑張らないと。）」

「（リラックスリラックス 大丈夫だから。）まずはスイウ。ちょっとおいで。」

「ゴロツ？（何？）」

スイウはリンの膝の上に座った。

「リラックスして。（別に優勝できなくてもいいのよ。初めてだし。）」

リンはスイウをブラッシングし始めた。

「ゴロゴロ。（でも出るからには優勝したい。）」

「（全く…でも、できれば優勝したいわね。）」

「キルキル。（私も頑張ります。）」

「（ありがとう、メティス。）よし、スイウ終わりっ。次はメティスよ。」

「ゴロゴロツ （ありがとうっ）」

「キル。（うん。）」

スイウが降り、メティスが乗った。

「絶対に上手くいくわ、メティス、頑張ろう！」

「キルッ！（うん！）」

リンはメティスもブラッシングすると、二匹をボールに戻し、メティスのボールにボールカプセルをつけ、シールを貼った。

「花咲き誇るこの町に、ようやくポケモンコンテストがやってきました！お待たせしました！ポケモンコンテストソノオ大会！司会は私^{わたくし}モモアンがお送りいたします！。。」

長いオープニングが終わり、最初の人から演技が始まった。しばらくモニターで演技を見ていると、リンの二人前の人が出てきた。

『お次はコナタヒカリさんです！Here we go!』

『ポツチャマ！ステージオン!』

『ポツチャマ！（任せて!）』

藍色の髪をポニテにしている少女が投げたモンスターボールから、水色のペンギンのようなポケモンが出てきた。

「あっヒカリだ!」

「（ヒカリ？ヒカリがいるの!？）」

スイウのボールがカタカタと揺れる。

「（うん。ポツチャマをもらったみたいね。ほら、一匹余ってたじやない。）」

「（え…あのポツチャマなのね…私仲良くできないかも…。）」

「何かあったの？」

「態度が大き過ぎる。」

スイウはバツサリと言い切った。それを聞いてリンはクスクスと笑う。そして、モニターを見ながらこう言った。

「もうすぐヒカリの演技が終わるから、スタンバイしに行こうか。」

「うん」

「う…うん。」

「メティス、落ち着いて 大丈夫。あなたならきつと上手くやれるわ。」

リンはメティスのボールを撫でながら言う。

「頑張るっ。」

「その調子よ そろそろ行きましょう。」

リンはスイウのボールをポケットの中に入れ、メティスのボールを手に持ち、会場脇へ向かった。

リンの一人前の人は、またまたリンの見覚えのある人だった。

「…ケンゴ？」

「うわっ!?!」

その人は慌ててリンの方を向いた。

「誰だ!?!…って、リン!?!」

「やっほお ケンゴ。久しぶり」

リンの一人前の人はケンゴだった。それからすぐにケンゴの番が来た。ヒカリはリンの隣を通り過ぎたが、リンに全く気がついていなかった。

やがてケンゴの演技が終わり、リンの番がやってきた。

「お次はサヤマリンさんです! Here we go!」

「メテイス! Play on the stage!」

「キルキルッ! (任せてー!)」

たくさんの星と共にスイウの姿が現れた。

「メテイス、念力」

「キルキルッ (念力)」

ピタッと全ての星がその場に止まった。

「おおーっとお!?! シールから出てきた星を使って一体何をす

もりだあ!?!」

「メテイス、影分身からテレポート」

「キルツ (影テレっ)」

星の数と同じだけのメテイスの分身が現れ、それらが全てテレポートにより、星の上に乗った。メテイス本体はステージにいる。

「何ということでしょう!影分身とテレポートでこんなことをするのは!」

「(メテイス、ナイスネーミング)メテイス、願い事」

「キルキルツ (ありがとう 願い事)」

キラキラと会場中に光が舞った。分身も一緒に願い事をしたため、たくさんの光が舞う。客席から拍手が舞う。

「これは素晴らしいです!願い事の光が会場中に舞っています!」

「メテイス、サイケ光線」

「キールツ (サイケ光線)」

メテイス本体がクルクルと回りながらサイケ光線を発射する。サイケ光線により、シールから出てきた星とメテイスの分身たちが粉々になり、先程の願い事と合わさってより一層光が舞った。客席からは感嘆の声が漏れる。

「これは！とても綺麗です！先程願ひ事の光とも合わさつてより一層輝きを増してします！」

そんなモモアンの声を聞きながら、リンとメティスは同時に礼をする。客席から拍手喝采がリンとメティスに向けられる。

「さて、全ての方の演技が終わりました！二次審査へ進めるのは一体誰なんでしょうか！？」

リンが楽屋に戻ると、まっすぐリンの方に向かって一匹のムウマがやってきた。

「ムウー！（リンー！）」

「ミスチフ！？」

ミスチフはリンに飛び（？）ついた。

「ミスチフ、見てくれてた？」

「ムウ！ムウムウムウマ！（うん！すっごく綺麗だった！）」

「そっか ありがとう」

「リン、綺麗だった。」

「あっヤマト、ありがとう」

ヤマトはミスチフに若干呆れながら言った。

「ミスチフ、あなた真つ先に飛んできたんでしょ？」

リンはクスクスと笑いながら言う。

「ムウ…。(だって…)」

少しムスツとしながらミスチフが言う。

「ホントに…。」

リンはヤマトと話しながら控え室に戻った。すると帽子を被り、ピカチュウを肩に乗せた少年と、髪がツンツンしていて、背の高い青年(?)がヒカリの前にいた。

「ヒカリ？」

リンは少し遠慮しながらヒカリに話しかけた。

「あっ！リンじゃん！久しぶり！」

「久しぶり、ヒカリ。いつ出発したの？」

「ついこの間だよ！そうそう、サトシ、タケシ、この子はあたしの親友のリン！」

「初めまして。リンです。」

リンがそう自己紹介すると、サトシと呼ばれた少年が自己紹介した。

「オレはサトシ！こいつは相棒のピカチュウ！」

「ピッカッチュウ！（よろしく！）」

サトシの肩に乗ったまま、ピカチュウは片手を挙げて挨拶した。

「俺はタケシだ。」

「そういえば、リン、その後ろの人って誰？」

「あつ…忘れてた…。」

「お前…失礼だな。初めまして。俺はヤマト。」

とヤマトが周りをキョロキョロしていたのを止め、三人に自己紹介した。その刹那。

「ムウ…。（ばあ…。）」

「いついやあああ！」

いつの間にかリンの腕を抜け出していたミスチフは、後ろからヒカ
リを驚かせた。

「ポチャッ！（何をするんだ！）」

「ムウツ（驚かせた）」

「こらミスチフ、ダメでしょ？ヒカリ、ごめんね？驚いたでしょ？」

「う…うん。大丈夫。」

ハハハとヒカリは笑う。

「そうそう、リン！あたしリンの演技見たよ！スッゴク綺麗だった
！」

「ホント？ありがとう。」

「（ヒカリって人、誰かはわからないけど嬉しいっ）」

メティスのボールがカタカタと揺れる。

「（よかったね。）そうだ。メティス。出てきて。」

「キルキル。（うん。）」

「はい、ヤマト。メティスよろしく。」

「ああ。わかった。」

リンはボールカプセルを外したメティスのボールをヤマトに渡した。

「そのキルリア、だいぶ育ててあるようだな。」

そう言ってタケシが屈み、メティスを見始めた。

「タケシはブリーダーなんだ。」

とサトシが言った。未だにヒカリのポツチャマとミスチフは言い争いをしているようだ。

「ポチャー！（つつくー！）」

「ムウ！？（えっ！？）」

「メティス。」

「キル。（うん。）」

リンは静かにメティス呼び、メティスはすぐさま念力を使い、ポツチャマの動きを止めた。

「ポ、ポチャ！？（な、何！？）」

「ヒカリ、ごめんね？私のミスチフがあなたのポツチャマを怒らせちゃったみたい。つつくをしようとしてたから止めたけど。」

「ポツチャマ！？」

「ポチャ…。（ごめんなさい…。）」

「メティス、念力を解いて。」

「キル。（うん。）」

ポツチャマの体が自由になった。

「それとミスチフ、相手を怒らせないの。」

「ムウ…。（ごめんなさい…。）」

ポツチャマもミスチフも同じようにうなだれている。

「（スイウ、どうやらヒカリのポツチャマは根は素直みたいね。傲慢な態度が玉にキズってところかしら？）」「

「（そうみたい。だとしても、多分私は仲良くできないと思う。）」「

「（きっぱり言い放つのね。）」「

クスリと少しだけ笑う。そのとき、モニターにモモアンの姿が写し出された。

『お待たせいたしました！一次審査の結果が出ました！二次審査に進むのは…この八人だ！』

パンツと顔写真が写し出される。リン、ヒカリ、ケンゴの写真もあった。

「まずは一次審査突破だね！ケンゴには絶対に負けない！もちろんリンにもね！」

「ええ。私も負けないわ。」

「そろそろ二次審査か。ヒカリ、俺たちは客席に戻るよ。ヤマトも行くぞ。」

「ああ。」

「じゃあまた後でな、ヒカリ、リン。」

「うん！」

サトシ、タケシ、ヤマトは客席に戻っていった。ヤマトはメティスとミスチフ連れていた。

リンの初コンテスト【前編】（後書き）

【リン】

ヒカリー！

久しぶりだねー！

【ヒカリ】

ホント久しぶりー！

【サトシ】

うらら…だっけ？

リンに聞いたんだけど。

うん

そうだよー！

私はうらら です！

【ヒカリ】

あれ？タケシとヤマトはどこに行ったの？

【リン】

そういえば…。

【サトシ】

どこに行ったのか知らないけど、お前（うらら）が関わってそうだな。

ギックウ！

な…なんでもないよ…。

お使いなんて頼んでないんだからね!?

【リン・ヒカリ】
頼んだのね?

はう!

ちっちがつ!

ってか何でそんなことを!?

【サトシ】

うらら 言ってたじゃないか。

マジで!?

な…!

じゃっじゃあ!

私はここで!

さようなら!

【リン】

逃げた…。

【ヒカリ】

まあいいじゃない!

【サトシ】

そっだぞ?

それに、そろそろ次回予告の時間だ。

【リン】

わかったわ。

次回は、

「リンの初コンテスト」【後編】
です！

【ピカチュウ】

ピカチュウ！

【リン】

ピカチュウかわいい！

リンの初コンテスト【後編】（前書き）

【リン】

うらら さん、最近、遅いですよね？

だって…。

高校生になってから色々忙しいんだもん！

【リン】

へえ？

その割にはカラオケによく行っているようですが？

それに、私の情報によると、アニソンばかり歌っているとか…？

ちっ違うもん！

ちゃんと普通の歌も少し《…》は歌ってるもん！

【リン】

ということは、カラオケに行っていることは否定しないんですね？

…………ハッ！。

【リン】

うらら さんって…バカですよね。

はう…。

とっとりあえず！

「リンの初コンテスト」【後編】

のスタートです！

【リン】

ホントにびっくりなんです…。

リンの初コンテスト【後編】

リンはモニターに写し出された対戦表を見た。

「偶然にも、私たちは最初は戦わないみたいね。そうね…会えるのはファイナルかしら？」

リンがヒカリに言った。

「リン！ファイナルで会おうね！絶対だよ！？」

「わかったわ。でも、お互い手加減はなしよ？」

「ええ！もちろんよ！そういえば、リンは二次審査はどんなポケモンを使うの？」

「あら。知りたいの？」

「うん！」

ヒカリは興味津々という顔でリンに聞いた。

「そうね…。私は三匹しかポケモンを持っていないわ。これでわかるでしょ？じゃあまた後でね？今からだから。」

そう言ってリンはスイウのボールにボールカプセルをつけ、シールを貼りながらステージ傍に向かった。

「信じれば叶う。」（ね？スイウ。覚えてるでしょう？）

「（当たり前前　だつてパパのご主人の口癖なんでしょ？）」

「（そうそう。でも、まずは楽しまないとねっ？）」

「（うん　バトルは楽しまないと）」

カタカタとスイウのボールが揺れる。

「最初のコンテストバトルは、赤コーナーはナギサシティ出身のハタカナナセさんでございます！対する青コーナーは初出場にして最も会場を沸かせた、フタバタウン出身の期待の新人！サヤマリンさんでございます！」

両者がそれぞれの位置に着いたのを確認すると、モモアンはバトル開始のコールを言った。

コンテストバトルの結果はリンの圧倒的勝利に終わった。相手のポイントを全てなくしたうえに、ポケモンまでバトルオフにした。しかも自分のポイントは全くと言って過言ではないほど減っていないかった。

「うわー…リンスゴイ…。」

控え室ではヒカリが一人そんなことを呟いていた。

「見事な勝利でした！リンさんとミズゴロウの息がとても合っていましたね！」

そう言ってモモアンはコンテスト、大好きクラブ会長のスキゾー、

ソノオタウンのジョーイにふった。

「こんなバトル、私も見たのは二回目です！素晴らしいです！」

「コーディネーターとミスゴロウのコンビ。いやー好きですねー。」

「リンさんとミスゴロウの息が合っていてとっても素晴らしいです！」

その頃のリンは、高揚した自分の気持ちを必死に落ち着かせていた。

「ゴロゴロッ！（楽しかった！）」

「ありがとう、スイウ。（私も楽しかったわ。）」

リンはスイウを抱え、客席に礼をした。スイウをボールに戻してから控え室に帰った。

「スゲー…。」

「ピカ…。」

サトシもピカチュウも目を真ん丸にしている。目が細くてよくわからないが、タケシも驚いているようだ。ヤマトは何も言わないが、内心かなり驚いている。

「これは…あとの人たちにはプレッシャーだな。」

とタケシが静かに言った。

「ああ。」

ヤマトはそう一言言った。何故だかドキドキする自分に驚いているようだ。変だなと思いつつ、少し待っていると次のバトルが始まった。

「リン！スゴかったよ！スイウも！今まで見た中で一番だったよ！」

「そうかな？私はまだまだだホンキは出してないよ？」

うーんと考えながらリンは言う。そんなリンに苦笑しながら言う。

「今の言動は…だいじょばないと思う…。」

「ふえ？」

リンがふと周りを見渡すと、周りの人がリンを睨んでいた。

「え…えへっ？」

少しだけ首を傾げて引き釣りながら笑った。

引き釣ってはいるが、リンの美しさ、可愛さはなくなることはない。周りの人の視線が柔らかいものに変化した。

「あつ。ヒカリ、次じゃない？」

「ホントだ！急がなきゃ！」

「頑張つてね？ヒカリ。」

「だいじょーぶ！言ってくるねっ」

ヒカリが元気よく控え室を出る。

それからヒカリが帰ってくるまで周りの人に囲まれたことは言つまでもない。

「そつえば、ケンゴは？」

ふとヒカリが言う。

「モニター見て？」

「えっ？」

ヒカリがモニターを見ると、ケンゴが入場しているところだった。

「今からみたいね。」

「うん。」

ヒカリは食い入るように見る。

「このまま順調に勝てばバトルするのはケンゴだもんね。」

「うん。そつなの。」

珍しくヒカリが真面目に言う。それほどホンキ、という訳だ。

「ヒカリ、頑張つてね？私とファイナルで戦うんでしょ？」

「もちろん！その為にはケンゴのバトルスタイルを見なきゃ。」

「そうね。」

それから二人はケンゴのバトルを見た。それからブレイクタイムを挟み、とうとうヒカリのスタンバイの時間が来た。

「ヒカリ、ファイナルでね？」

「うん！絶対だいじょーぶ！」

パチンツとリンとヒカリはハイタッチをした。ケンゴはヒカリにこう言った。

「ヒカリ、手加減はしないからな。」

「わかってる。でもあたしは約束したの。リンとファイナルで戦うって。だからここでケンゴに負ける訳にはいかないの！」

そう言つてヒカリとケンゴはステージに向かった。

「ヒカリ、頑張つて。信じれば叶うのよ。それに、大丈夫なんでしょ？」

リンはステージに立った二人をモニターで見ながら言つて、クスリと笑った。

「（私もヒカリと戦いたいな。あのポツチャマともね？）」

「(あら? 気に入くないんじゃないの?)」

「(バトルってストレス発散になるのよ?)」

スイウが笑いながら言う。

「(ふふふ。スイウ、あなただいぶ黒くなってるわよ?)」

一人クスクスと笑いながらリンは言う。

「(それでもないよ? 私、あのポッチャマだけには負けたくない。意地でもね? あっ、あと、サトシって人のピカチュウとも戦いたいな! って思ってみたり)」

「(でも... あのピカチュウ、かなり強そうだよ?)」

リンはモニターを見ながら言った。

「(わかってる。でも、私の考えから言うと、他のパートナーたちはまだそんなに強くないと思う。メティスが言ってたけど、サトシのパートナーはピカチュウ以外にナエトルとムックルだって。)」

「(それでも典型的には不利よ? いくらスイウが地震と冷凍ビームを覚えているとはいえ。)」

「(でも私は戦いたい。強い相手と戦いたいの。)」

「(... わかったわ。サトシを誘ってみる。多分ノってくれるわ。バトル好きそうだし。)」

しょうがないわね、と言いながらリンはスイウに言う。わーいと言いながらスイウはボールをカタカタと揺らす。わー！とモニターから声が上がった。

「ヒカリが勝ったのね？スタンバイしますか。」

フツと立ち上がり、コツコツと靴を鳴らしながらリンはステージ傍に向かう。

「スイウ、頑張ろうねっ」

うん！とスイウは答え、ボールがカタカタと揺れた。ヒカリは控え室に戻る途中にリンに頑張れと言った。

「さてセミファイナル第二回戦でございます！赤コーナーはここ、ソノオタウン出身のシゲダミノルさんです！対する青コーナーは、先程素晴らしいバトルを見せてくれました、フタバタウン出身のサヤマリンさんです！」

コールに合わせ、両者がステージに立った。

「ルンパッパ！レディーゴー！」

「スイウ！Play on the stage！」

「ルンパーツ！（まっかせっとけー！）」

「ゴロゴロッ（楽しもう）」

リンのバトルはすぐに終わった。結果はもちろんリンの勝利だ。完封勝利ではなかったが。

ファイナルの前にブレイクタイムがあり、サトシ、タケシ、ヤマトが控え室にやってきた。

「キルキルッ！（リン！）」

「ムウー！（リンー！）」

「きゃあ！？メティス！？ミスチフ！？」

メティスもミスチフもリンに飛びつく。

「こらこら、メティス、ミスチフ、二人ともやめろ？」

ヤマトが柔らかく諭す。

「キルッ。（ヤダッ。）」

「ムウッ。（うちもっ。）」

しかし、二匹ともリンに引っついて離れようとしてない。

「仲いいのねー…。」

とヒカリが感心したように言う。

「ピカピカ？（話してあげたら？）」

「キルツ。(ヤダッ。)」

「ムウツ。(ヤダッ。)」

ブイツと二匹はそっぽを向く。その会話を聞きながら苦笑しているリンを見て、ヤマトは大体のことを悟った。

「全く…リン、ボール。」

「ありがとう。メティス、ミスチフ、悪いけど、戻って？」

リンは無言を言わずにメティスとミスチフをボールに戻す。二匹のボールは不満そうに激しく揺れる。

「ヒカリ、もうすぐね。」

「うん！あたし、絶対に負けないんだから！」

「私だつて負けないわ。ヤマト、その子たちは客席に戻ってから出してあげて？そのころにはきっと冷静になってるハズよ？とくにメティスはね？」

「ああ。わかった。」

「じゃあ、今から行ってくるわ。ヒカリ、私たちはライバルだからね？」

「わかってる！サトシたちは客席に戻った方がいいよ？」

「そうだな。戻るか。」

サトシの言葉を合図に、三人と一匹ヒカチュウは客席に戻った。ステージの傍に向かい、スタンバイしているとコールがかかった。

「みなさん！お待たせいたしました！ファイナルステージのお時間でございます！今回のファイナルは親友同士のバトルでございます！赤コーナーはフタバタウン出身のコナタヒカリさんです！対する青コーナーは同じくフタバタウン出身のサヤマリンさんです！」

わあああ！という歓声が舞う。そんな中、リンとヒカリの二人がステージに立つ。

「力いっぱい戦ってください！Here we go！」

「ポツチャマ！ステージオン！」

「スイウ！Play on the stage！」

「ポツチャマ！（任せて！）」

「ゴロゴロツ （楽しもうね）」

水色のポケモンが二匹現れた。スイウの目の前には巨大なハートがある。

「スイウ！ハートを冷凍ビームで壊すのよ！」

「ゴローツ！（そーれーっ！）」

スイウの鋭い冷凍ビームが的確にハートの中央を貫く。砕けたハ

トが細かな破片になり、光が舞う。
客席からは感嘆の声漏れる。

「ポツチャマ！渦潮！」

「ポチャー！（とおりゃー！）」

ゴオオオと大きな音と共に渦潮を発生した。

「ポーチャ！（えーい！）」

ポツチャマはステージの中央あたりに渦潮を投げた。

「ポツチャマ！その渦潮に乗るのよ！」

「ポチャツ！（えいつ！）」

ポツチャマは渦潮に乗った。少しリンのポイントが減った。

「まだまだよ、ヒカリ。スイウ！あの渦潮に冷凍ビーム！」

「ゴーローツ！（えーい！）」

カッチンと渦潮が固まった。必然的にポツチャマは凍った渦潮に動けないようにされている。

「ポツポチャ！？（なっ何！？）」

ヒカリのポイントがだいぶ減った。

「今のうちよ！スイウ！地震！」

「ゴローツ！（えーい！）」

「なんと！リンさんのミスゴロウは地震を使えるようです！」

地震により、凍った渦潮が粉々に砕け散る。またヒカリのポイントが減った。

「スイウ！ポツチャマの着地点付近に水鉄砲&冷凍ビーム！」

「ゴロツ！（えいつ！）」

ポツチャマが落ちてくるところを水鉄砲で濡らし、冷凍ビームで凍らせた。

「ポツポチャー！？（えっえー！？）」

ポツチャマはツルツルと滑っていく。その間にもヒカリのポイントは減る。

「ポツチャマ落ち着いて！床に向かってつつくよ！」

「ポツポチャ！（うっうん！）」

ガンガンガンツとポツチャマが床をつつき、割れた氷が回りに飛び散った。

「これは綺麗です！相手の攻撃を上手く利用しています！」

少しリンのポイントが減った。が、断然リンの方がポイントは多い。

「スイウ！冷凍ビーム！」

「ゴローツ！（えーい！）」

スイウは自分の周りに氷の膜を張った。

「ポツチャマ！あの球に向かってつつく！」

「ポチャツ！（うん！）」

ポツチャマのくちばしが長くなり、どんどんスイウに迫る。

「スイウ！ハイドロポンプ！」

「ゴローツ！（とりゃー！）」

スイウは球の中でハイドロポンプをし、ポツチャマに向かって球ごと動いた。

「ポツチャマ！ひるまないでそのままつつく！」

「ポチャツ！（うん！）」

あと少しでつつくが当たるところで、リンは叫んだ。

「スイウ！アイス・ド・ボールごと守る！」

「ゴローツ（了解）」

すぐに緑色の膜がアイス・ド・ボールを包む。ポツチャマのつつくは、スイウの守るにより不発し、さらに弾き飛ばされた。

「ポ…ポチャ…。(む…無理…。)」

「ポツチャマ!?!」

「ポツチャマ、バトルオフです!よって勝者はフタバタウンのリンさんです!」

モニターにリンとスイウとメティスの写真が写しだされた。

「やった…。やったよお!スイウ!私たち勝ったんだよ!」

「ゴロゴロッ! (やったねーっ!)」

スイウはリンに飛びつき、リンはスイウを抱きしめた。

「ポツチャマ、ありがとう。ゆっくり休んでね?」

ヒカリはそう言ってポツチャマをボールに戻し、リンに近づいてきた。

「リン、おめでとう。私全然リンのポイントを減らせなかった。リンと戦えてよかった。」

「ありがとう、ヒカリ。私もヒカリと戦えてとっても楽しかった!」

それからリンはコンテスタからリボンをもらい、控え室に戻った。

「キルツ。(おめでとう。)」

「ムウ！(おめでとう。)」

「あら、テレポートで来たの？(ありがとう、二人とも。メティス、落ち着いた？)」

着替え途中のリンとヒカリの元に、メティスとミスチフがやって来た。

「キル。(うん。)」

着替えながら頭の中で会話をしていると、ヒカリがいきなりこんなことを言った。「リンって、ポケモンに名前つけてるんだね。だって、スイウにメティスにミスチフでしょ？」

「そうね。せっかく私のパートナーになってくれたんだもの。その子に相應しい名前をつけてあげるべきだわ。まあ、これは私が勝手に言ってるだけなんだけどね？」

フフフとリンは笑いながら言う。

「リンって…なんかすごいね。」

着替え終わったヒカリがカバンを抱えて言った。

「そうかな？さて、着替え終わったから行くよ、ヒカリ。メティスとミスチフもよ？」

「はぁーいつ。」

「キル。(うん。)」

「ムウツ。(うんっ。)」

メティスとミスチフを連れ戻したリンとヒカリはサトシ、タケシ、ヤマトの元に戻った。

「お疲れ、リン、ヒカリ。」

とヤマトがリンにメティスとミスチフのボールを渡しながら言った。

「ホントお疲れっ。」

「ピピカチュッ！(お疲れっ！)」

「ありがとう。」

「ありがとう！サトシ！ピカチュウ！」

リンはメティスとミスチフをボールに戻しながら言った。

「そうだ。サトシ、明日でいいんだけど、私とバトルしてくれない？」

「バトル？オレとか？」

「うん。ダメ…かな？」

リンは上目遣いでサトシを見た。サトシは少し赤くなりながら答えた。

「いいいいぜつ。明日なつ。」

「やったあ！（良かったね！スイウ！）」

「（うん！）」

嬉しそうにカタカタとスイウのボールが揺れる。

楽しそうにサトシと話しているリンを見て、ヤマトの中に少し歪んだ感覚が生まれた。

「リン、晩飯食いに行かないか？」

「ご飯？いいねっ。私お腹空いてるんだ！。ヒカリたちも行かない？」

「えっ？ご飯？行く行く！あたしもお腹空いたし。ね？行こ？サトシ、タケシ。」

「いいな。行こうぜ！ヤマト、いいだろ？」

サトシは憎めない笑顔でヤマトに許しを請う。つついヤマトはああ、と返事をしてしまった。

それから五人はポケセンでポケモンを回復させたあと、カフェに向かい、そこで夕食を取った。

その間、リンの隣にはずつとヒカリがいて、反対側にはメティス。

リンの膝の上にスイウ。リンの頭の上にミスチフがいて、リンはずつとヒカリと話していた。その間ヤマトはずつと自分がリンに抱い

た、歪んだ感覚について考えていた。

「ゼニゼニ。」

箸をくわえたまま固まったヤマトを心配してゼニガメがツンツンとつついてきた。

「すまない。なんでもないんだ。心配かけたな、ゼニガメ。」

ヤマトはゼニガメを安心させるように頭を撫でた。

「ゼニゼニ？」

「ああ、大丈夫だ。お前は安心して飯を食え。」

「…ゼニ。」

決して何を言っているのかわかっているわけではないが、ゼニガメの態度からいってもう深く詮索しないことにしたようだ。

「ヤマト？どうかしたの？さっきから何かを考えてるみたいだけど？」

リンがスイウとメティスとミスチフをヒカリに任せて、メティスの隣に座っていたヤマトに近づき、ヤマトの顔を覗き込んだ。見る見る内にヤマトの顔が赤くなる。

「べっ…別に何でもない…／＼／＼」

赤くなっているヤマトと、そんな状態のヤマトを見て頭の中にクエ

スチヨンマークが浮かんでいるリンを見て、ヒカリはニヤニヤと笑っている。

そんな楽しい夕食を取ったあと、ポケセンの部屋でその日を終えた。

リンの初コンテスト【後編】（後書き）

【リン】

さて、ようやく仕返しできますねっ。

今日はつらら さんのためにヤマト、ヒカリ、サトシ、タケシにも来てもらったんですよっ

【ヤマト】

つらら さん。

覚悟してくださいね？（黒笑）

【ヒカリ】

こんなことしていいのかな？（とか言いながら楽しそう。）

【サトシ】

痛いと思うけどな…？

【ピカチュウ】

ピッカッチュウ。

【タケシ】

俺は見学することにしておくよ。

タケシ〜。

あんたは私の味方？

【タケシ】

そんな訳ないじゃないですか。

俺は見て笑っていますから。

私に味方はいないイイイ!?

【リン】

ではつららさん。

歯を食い縛ってください 痛いと思いますよ?

いやアアアア!

関節鳴らしながら近づいてこないでエエエエ!

【リン】

覚悟してください!

いやアアアアアア!

【ヤマト】

スゲー…。

【ヒカリ】

さすがリン…。

【サトシ】

リンだけでいいんじゃないのか?

【ピカチュウ】

ピピカチュッ。

【タケシ】

面白いな。

う…うう…。

だ…誰か…コールをお願い…（コトン。チーン。）

【リン】

ふうー。

ストレス発散

さて、次回は

「壮絶！キレたリン！」

です！

壮絶！キレたリン！（前書き）

はう…。

眠い…。

疲れた…。

足痛い…。

【リン】

どうしたんですか？

うらら さん、何か変ですよ？

ちょっと訳ありで…。

では、本編スタートですう…。

「**壮絶！キレたリン！**」

「これより、サトシVSリンの2対2のダブルバトルを行います。」

「**お願いします。**」

「**よろしくー！**」

サトシ、リンがバトルフィールドに立ち、タケシが審判。ヤマトとヒカリは見学である。ちなみに、場所はソノオタウン内ではない。ポケセン裏のバトルフィールドには先客がいたのだ。

「**では、始め！**」

「行くのよ！スイウ！メテイス！」

「**ゴロゴロツ！（負けないっ！）**」

「**キルツ。（私もっ。）**」

「**行け！ピカチュウ！ナエトル！**」

「**ピカッ！（うんっ！）**」

「**ナルー。（頑張るー。）**」

サトシはピカチュウとナエトルを繰り出してきた。タイプの異なるタイプにはス
イウにとても不利。ちなみに、ミスチフはヤマト、ヒカリと共に見
学だ。

「先攻は譲るぜ。」

とサトシが余裕綽々に言った。

「ありがとう。スイウ！ナエトルに冷凍ビーム！メティス！自分の周りに影分身で分身を作つて！」

「ゴーロー！（冷凍ビーム！）」

「キルキル。（影分身。）」

細くて真つ白な冷凍ビームがナエトルに向かい、メティスの分身がメティスの周りにたくさんできた。

「ナエトル！葉っぱカッターで冷凍ビームを切り裂け！ピカチュウ！スイウに十万ボルト！」

「ナルー！（葉っぱカッター！）」

「ピーカーチューー！（十ー万ーボルトー！）」

葉っぱカッターと冷凍ビームがぶつかり、若干冷凍ビームが強かったのか、葉を含んだ氷の柱ができた。しかし、ピカチュウの十万ボルトがスイウに襲いかかる。

「ムダよ。スイウ！守る！メティス！分身も使つてピカチュウを囲むのよ！」

「ゴロツ。（守るっ。）」

「キルキル。(テレポート。)」

薄緑色の膜がスイウを包み、十万ボルトからスイウを守った。その間にメテイスはテレポートで自分と分身たちを移動させ、ピカチュウの周りを囲った。

その時のある草むらの中。

「スゴいのニヤ。あのミスゴロウ。とっても強いニヤ。」

と人の言葉を話すニヤースが言った。

「なら、あのミスゴロウをボスに献上すれば…?」

「シンオウ征服、スピード出世でいい感じー!」

と赤い髪の気が強そうな女性と、お坊っちゃん系の青い髪の男性が言った。

「そうと決まれば、さっさと準備するニヤー!」

「ソーナンス!」

「はいはい。あんたはでなくていいから。」

そう言って赤い髪の女性はソーナンスを戻す。二人と一匹はすぐさまどこかへ姿を消した。

見学中の二人と一匹。

「ヤ…ヤマト？」

「何だ。」

ヒカリは不機嫌そうなヤマトに恐る恐る話しかける。

「ど…どうしてそんなに不機嫌なの…？」

「何か無性にハラが立つ。」

「誰に？」

「…サトシにだ。」

ヤマトはサトシを少し睨んだあと、そう言った。その言葉を聞き、ヒカリにはキュピーン！ときた。ヒカリはヤマトの手を引き、バトルフィールドから離れた場所に連れていった。

「ヤマト、今、リンとバトルしてるサトシがムカつくのよね？」

「…あぁっ。」

ムカつき気味にヤマトが言った。

「あたし、思うんだけど、あっ、もし違ってたらごめんね？ヤマトって、リンのこと好きじゃないの？」

「はあ？俺が？リンのことを？」

ヤマトはヒカリの言葉に耳を疑った。

「なんかさ、ヤマト、ヤキモチ妬いてるみたい。」

「誰に？」

「サトシにだよ。」

あっけらかんとヒカリは言う。

「よくわからないんだが、“好き”ってどんな気持ちなんだ？」

「“好き”って気持ちはねー…。その人を見ると、ドキドキして、胸がキューってして、切なくなってきたりするの。」

「ドキドキ…？キュー…？切なく…？」

ヤマトは自分を振り替えてみた。すると、自分が全てに当てはまることわかった。

「俺が…リンのこと…好き…？」

「そうそう。たとえば当てはまるわ。」

困惑しているヤマトを他所に、ヒカリは少し楽しそうだ。

「ムウ…。」

その会話を聞いていたミスチフはニヤリと笑った。

そんなことも知らないバトルフィールドの三人。

「ピツピカツ!? (なっ何っ!?)」

「ピカチュウ! 落ち着くんだ!」

「隙だらけよ? スイウ! ナエトルに冷凍ビーム!」

「ゴローツ! (冷凍ビーム!)」

ピカチュウばかりに気を配っていたサトシ。その隙にナエトルに冷凍ビームをお見舞いする。

「ナエトル!? 避けるんだ!」

「メティス! 念力でナエトルとピカチュウの動きを封じるのよ!」

「ナっナルー!? (なっ何だ!?)」

「ピカツ!? (えっ!?)」

全員のメティスが半々に別れて、片方はナエトルの、もう片方はピカチュウの動きを止めた。

動けないナエトルにスイウの冷凍ビームが直撃する。

「ナ…ナルー…。(ダ…ダメだ…)」

「ナエトル！戦闘不能！」

「ナエトル、サンキュー。ゆっくり休めよ？」

「ナルー…。(うん…。)」

これで2対1に。

タイプ的にはサトシに有利だが、数的にはリンが有利だ。

「ピカチュウ！周りに十万ボルトだ！」

「ピーカーチュー！（十万ボルトー！）」

メティスの念力が切れた頃にピカチュウが十万ボルトをする。次々にメティスの分身が消えていく。

そして、残り一匹にも十万ボルトがあたった…？

「いない！？」

「ピカッ！？（本体は！？）」

なんと、最後の一匹も分身だったのだ。

「まだまだだわ。メティス！そこからサイケ光線！スイウ！地震！」

「キルーツ！（サイケ光線ーッ！）」

「ゴロツ！（地震っ！）」

メティスはいた場所…つまり、高くそびえ立っていた氷の柱の上か

らサイケ光線をし、スイウはその場で地を揺らした。

「ピカー！（うわぁー！）」

まともに二匹の攻撃を受けたピカチュウはパタンと倒れた。

「チャー……。ムリー……。」

「ピカチュウ、戦闘不能！よって勝者はリン！」

「やったぁ！」

「ピカチュウ！」

タケシのコールと共に、リンはスイウとメティスの元に、サトシはピカチュウの元に駆け寄った。

「ありがとう、スイウ、メティス。」

「ゴロゴロッ（いえいえっ）」

「キルッ。（楽しかったっ。）」

リンはスイウとメティスをボールに戻さずに、サトシのそばに向かった。

「サトシ、これ使って？」

「おっサンキュー。」

リンはサトシにいい傷薬を二つ渡した。それを使って、サトシはピカチュウとナエトルを回復させた。バトルが終わったのに気がついて、ヤマトとヒカリとミスチフが三人と三匹の元にやってきた。

「サトシもリンもお疲れ！スゴいバトルだったね！」

「ありがとう、ヒカリ。」

「サンキュー、ヒカリ。」

「ムウ！（リンー）」

「ひゃあ!？」

急に飛び込んできたミスチフを受け止めきれずに、ドンッとリンは尻餅をついた。

「いたたたた…。」

「ムウ…。（ごめんなさい…）」

「大丈夫。平気よ？ちょっとびっくりしただけだから、ね？」

とリンはミスチフをよしよしと撫でる。と、そこに一本の手が伸びてきた。

「ほらリン。立てよ。」

「あ、うん。ありがとうっ。」

「……………// //」

その手を掴み、立ち上がったリンに満面の笑みを向けられ、ヤマトは赤くなつた。そんなヤマトを見て、ヒカリはクスクス（むしろニヤニヤ）と笑つた。と急にヤマトの顔がサツと強張つた。

「何か来る！」

そう言つたと同時に、どこからかともなくロボットのアームが伸びてきて、ピカチュウ、スイウ、メティス、ミスチフが捕らえられた。

「スイウ!?メティス!?ミスチフ!?!」

「ピカチュウ!?!」

サトシとリンは自分たちのポケモンの名を呼ぶ。

「誰よ!あなたたち!」

とヒカリが言うと、わーっはっはっはっ!と言つ声と共にロボットから誰かが出てきた。

「誰よ!あなたたち!と言われたら。」

「答えてあげるが世の情け。」

「愛と勇気と平和を守り。」

「ラブリーチャーミングな敵役。かたきやく」

「ムサシ！」

「コジロウ！」

「ニヤースでニヤース！」

「銀河の主演は私たち！」

「我ら無敵の、」

「「ロケット団！」」

「ソーナンス！」

「マーネネツ！」

と赤い髪の女性と青い髪の男性とニヤースとソーナンスとマーネネツが言った。

「ロケット団！ピカチュウを離せ！」

「やーなこったー！誰が返すもんですか！」

んべーっとムサシを子供のようにあつかんべーをする。

「ピーカーチューー！（十万ボルトー！」

「ゴローツ！（いやっ！」

「キルーツ！（あぁーっ！」

「ムウーッ！（うあーっ！）」

ピカチュウの十万ボルトはドーム状の檻を伝ってスイウ、メティス、ミスチフにあたった。ドサツと三匹が崩れ落ちる。

「おーっほっほっほっ！バカなこと！」

「今回も電撃対策はバツチリなのニャ！今回は味方に浴びるようにしてみたのニャ。」

「リン！すまない！…リン？」

リンは俯いたまま、体を震わせている。この状況を危険と感じたヒカリが叫んだ。

「危ない！危ないから下がって！早く！サトシ！タケシ！ヤマトも！向こうに逃げなきゃ！」

「ヒカリ！？リンはどうするんだ！？」

とヒカリと走りながらヤマトが言う。

「今はリンがマジギレしてる…ホントに危ないから。」

とヒカリが真剣な顔で言った。若干恐怖も見えている。

「リン…？」

ヤマトは走りながら後ろを向いた。すると、何かどす黒いオーラが

見えた。

「…私のパートナーたちを盗って…許さない…。」

どす黒いオーラを放ちながらリンはゆっくりと歩きながらロボットに近づく。ロケット団は、リンの豹変ぶりに怯えて声も出ない。

やがてロボットの足元についたリンは一発、足の部分に拳を叩き込んだ。バキツという音がした。リンの腕はほとんどロボットの足に埋まっていた。

「……えっ?」「……」

ムサシ、コジロウ、ヤマト、サトシ、タケシが同時に言った。ヒカリは顔を手で覆いながら見ている。

「ふざけないで…。」

フツとリンはジャンプをし、スイウたちが閉じ込められているドーム状の檻を回り蹴りで壊した。リンと四匹はスタツと地面に降り立った。

「スイウ、ハイドロポンプ。メティス、サイケ光線。サイコウエーブ。」

「ゴローツ! (ハイドロポンプ!)」

「キルツ。(サイケ光線つ。)」

「ムウーツ! (サイコウエーブ!)」

三匹の攻撃が一斉にぶつかり、ロボットもろともロケット団は、やなかんじー！と言って飛んでいった。安心したのか、リンの体がフラフラと左右に揺れ、そしてパタンと倒れた。

「リン!？」

そうやってヤマトはリンの元に駆け寄った。ヤマトとリンの距離が近くなった頃三人は慌ててヤマトを追いかけた。

「おい！リン！大丈夫か!？」

ヤマトがリンの体を揺するが、リンの反応はない。

「ヤマト！そうになったらリンはしばらく目を覚まさない。けど安心して？リンは寝てるだけだから。」

後ろから追いついてきたヒカリが言った。

「ゴロゴロ…?」

「キル…?」

「ムウ…?」

三匹はそれぞれ心配しているようだ。

「仕方ない。部屋まで運ぶか。」

そう言つてヤマトは力強くリンを抱える（お姫さま抱っこで）。そばではヒカリがリンをうらめしそうに見ている。

「俺はソノオに戻るが、サトシたちはどうするんだ？」

「オレたちはリンとバトルしたあとはもう出発する予定だったからな。とりあえず、ポケモンたちを回復させなきゃいけないからソノオには戻るよ。」

「そうか。わかった。スイウ、メティス、ミスチフ、行くぞ？」

「ゴロツ。」

「キルツ。」

「ムウツ。」

「オレたちも行くか？」

「うん！」

「そうだな。」

ヤマトたち一行はソノオタウンへと戻った。その道中、ヤマトがふとリンの様子を伺うと、リンは気持ちよさそうに眠っていた。

「（か：かわいいっ／＼／＼）」

いきなり耳まで真っ赤になったヤマトを見て、サトシたちは驚いていた。

ソノオに着き、ポケモンたちを回復させ、リンを部屋に寝かせたあとヤマトはサトシたちを見送るべく、外に出た。

「気をつけてな。」

「ああ。」

「リンをよろしくっ」

ヒカリはわざとらしくヤマトに言った。

「なっ…／＼／＼お前っ…／＼／＼」

ハッキリと自分の気持ちを理解したヤマトは、真っ赤になって言った。

「あの子、自分のことだけに関してには鈍いの。だから、積極的に行かなきゃ！」

ヒカリはヤマトにエールを送る。

ヤマトはああ、と言って頷いた。

「今度はお前とも勝負がしたいよ、ヤマト。」

「ああ、俺もだ。」

男二人はがっちり握手を交わした。

そして、三人は旅立っていった。

「さて、リンの様子でも見に行きますか。」

ぶっつ、と溜め息を一つ吐いて、ヤマトはじんの部屋に向かった。

壮絶！キレたリン！（後書き）

よく考えたら、そういえば最近全くポケモンのゲームをしていないような…？

【リン】

うらら さん、それで小説が書けるんですか？

それが書けちゃうんだよねっ。

今回はオリジナルだったし

それに、ようやくヤマトも…。

フフフフフ…。

【リン】

うらら さん、怖いです。

やめてください。

あっ！

いつの間に私はこんなことを！？

では、次回予告…といきたいところなんだけど、今度からナシでいいかな？

正直、タイトル通りに行かないことが多いしさ…。ダメかな？

【リン】

別に構いませんよ？

めんどくさい仕事が減って、私にもいいですし。

軽っ！

ひゅっ！

ふえーん（p|q）
いいもんいいもん！
リンのバカあー！

【リン】

あら、行っちゃった。冗談が通じないみたい。
では皆さん、また。

新たな仲間（前書き）

ううう…。

【リン】

ど、どうしたんですか！？うらら さん！？

風邪ひいちゃって…。

今スゴい鼻声なのよ…。

【リン】

ど…どんまいです…。

ううう…。

もういいッスか？

本編スタートッス

【リン】

まあ、今回は見逃してあげましょう。

新たな仲間

部屋ではリンを心配して、スイウ、メテイス、ミスチフがそばに付き添っていた。が、三匹とも体力は回復したとはいえ、傷だらけだ。ヤマトは鞆から包帯と傷薬を取り出した。

「スイウ、メテイス、ミスチフ、リンが心配なのはわかるが、お前たちも傷だらけだ。きちんとケアしないと酷くなるぞ？」

「ゴロ…。」

「キル…。」

「ムウ…。」

三匹は渋々ながらヤマトの元に来た。ヤマトはその三匹を丁寧にケアした。やはり、一番スイウが痛々しかった。タイプの関係で、だ。リンは相変わらず気持ちよさそうに眠っている。今までの疲れも残っていたらしく、スヤスヤと眠っている。時々リンの顔を見てはヤマトは赤くなった。

次の朝になり、隣の部屋で寝ていたヤマトは起きてからリンの部屋に向かった。

「リン、入るぞ？」

カチャリとドアを開けると、リンはまだ起きていなかった。スイウ、メテイス、ミスチフがヤマトの方を向いた。

「まだ起きないのか？」

コクンとスイウが代表で頷いた。

「…そうか。」

と、その刹那。

「ん…んんー…。」

とリンが言いながらヤマトの方に寝返りをうつた。そして、目を覚ました。と同時にリンの目が見開いていく。

「（嫌な予感…。）」

「い…い…いやああー！」

「ゴフツ！」

ヤマトが思うと同時にリンが手元の枕を投げた。リンは自分の部屋にヤマトがいたことに驚いて思わず投げってしまったようだ。

「ゴロツ！？（リン！？何するの！？）」

「キルツ！？（ヤマトさんはリンを心配してたのよ！？）」

「ムウ！（スイウ姉ちゃんとメティス姉ちゃんの言う通りだよー！リンー！）」

「へっ？」

第二軍を用意していたリンは動きを止めた。そしてまじまじとヤマトを見た。

「何気に痛いな、これ。」

いてて、と鼻を擦りながらヤマトが言う。その姿に、リンは罪悪感を覚えると同時に、何故か顔が赤くなった。

「ヤマト…ごめんね？私ビックリしちゃって…。」

両手を合わせてリンは謝る。

「別に大丈夫だ。それよりリン、体は大丈夫か？手が痛いとかないのか？」

「ふえ？何のこと？」

「はっ？」

ヤマトは目をパチクリし、リンはキョトンとしている。そんなリンの様子を見てヤマトは納得した。キレた時のリンの記憶は残らないのだ、と。

「いや、別に何でもないんだ。ところで体は？」

「うん。大丈夫だよ？そういえばヒカリたちは？」

「ヒカリたちは昨日次の街に旅立ったぞ？」

「えっ！？昨日！？私見送ったっけ…？」

うーんとリンは考えて込んだ。

「リンは見送ってないぞ？何たって寝てたからな。」

「何で私は寝てたんだろ…。まあいいや。お腹空いたな。ヤマト、食堂行こうよ！」

「ん？ああ、そうだな。」

リンとヤマトが食堂へ向かっている途中、リンの腕の中のスイウ、メティスとフワフワ浮かんでいるミスチフが言った。

「（リンー！聞いて聞いてー！）」

「（なあに？どうしたの？）」

「（あのね、この包帯、ヤマトさんにしてもらったの！）」

「（そういえば、何でスイウもメティスもミスチフも包帯を巻いてるの？それに、スイウの包帯の量多くない？）」

「「「（えっ…。）」「」」

三匹の動きがカチンと固まった。

「（そ…その、転げちゃって。私が転げそうになったところをスイウ姉さんが助けてくれたんです。）」

「（う、うちはブーツとしてたら壁にぶつかっちゃってっ！）」

メテイスが転げるハズもなく、ミスチフもゴーストタイプの為壁にぶつかるワケもない。当然信じるわけ。

「（そつか。大丈夫だった？）」

あつたようだ。余りにもあつさり騙される為、三匹は苦笑した。

朝食を食べ、身支度を整え、ポケセンをチェックアウトしたリンとヤマトは次の街へ向かう為、ソノオタウンを旅立った。

途中、何人かとのトレーナーと戦いながら進んでいたリンとヤマトの前に大きな森が立ちはだかる。

「でつかーい！」

「だな。」

「（何か同類の気配がするなっ）」

と一匹出ているミスチフが楽しそうに言う。

「とにかく、先に進むか。」

「うん。それしかなさそう。その看板にそう書いてあるし。」

「だな。」

二人と一匹はその森が、天然の迷路と呼ばれるハクタイの森とも知らず、足を踏み入れた。

「な、何かさあ…。」

「ああ。」

「暗くない…?」

「そうだな。」

「な、何でそんなに平気なのよおー。」

とリンは言っつてギュッとヤマトの服の袖を掴んだ。 (無意識) 力
アアアツとヤマトの顔が耳まで赤くなった。

「ううう…怖いよおー…。」

「ムウ (うちはここ楽しいな) 」

「さっきから同じ道ばっかり通ってる気がする…。」

「そうだな。」

「しかも日が落ちてきてない? 今六時だよ? そろそろテントでも張
れるトコに行かなきゃ。」

「そうだな。」

リンとヤマトは少し歩いて、木があまり生えていないところを見つ
けた。

「…。」

「そうだな。」

森の外はまだ少しは明るいようだが、さすがにここは森の中。すでに明かりがなければ歩くのが困難だ。

「暗いな。そうだ！メリープ！出てこい！」

「メリー！（わーい！）」

体に電気を溜めたメリープが出てきたことによって周りは少し明るくなった。

「まだ暗いか。メリープ、充電だ。」

「メリー！（充電ー！）」

メリープの体が黄色く輝いた。周りがだいぶ明るくなった。

「だいぶ明るくなったねっ　ありがとう、メリープ。」

「メリー　（どういたしまして）」

メリープをよしよしと撫でてから二人で協力して二人分のテントを張った。

「よし、じゃあ小枝でも探してこようかな？スイウ！メティス！出てきて！」

「ゴロゴロッ！（うんー！）」

「キルー。(うん。)」

「よし！お前らも手伝え！出てこい！ゼニガメ！ガーディ！」

「ゼニツ。(ああ。)」

「ガウ！（おう！）」

「スイウ、メティス、ミスチフ、ゼニガメ、頼みがあるんだけど、木の枝をたくさん集めてきてくれない？私は食材の準備をしておくから。」

「リン？まさか料理するのか？」

ヤマトがア然として言う。

「失礼ねっ。私だって」料理くらいできるわよっ！そうだヤマト、ガーディ貸してくれない？」

「いいけど…なぜ？」

「火起こすのめんどくさいから、ガーディに起こしてもらおうと思っ
つて…ダメかなあ？」

リンは人差し指同士をくっつけたり離したりしながら下を向き、上
目遣いで言った。(やっぱり無意識)

ポフンツとヤマトの顔が真っ赤になった。弱々しい声でああ、と返
事をし、メティスたちを見送ったガーディを呼んだ。

後ろを振り返ったガーディはヤマトの顔に驚いていた。

「ガウ…。(ヤマトが…あのヤマトが…。)」

「どうしたの？ガーディ。」

「ガウ！（いや、何でもない！）」

「ふーん？まあいいや。スイウたちが帰ってくる前に準備しよう」と

そんな一人言を言い、リンは慌ただしく準備を始めた。ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、肉、キノコを切り、鍋の準備をしたところで四匹がメティスのテレポートで帰ってきた。

「ムウー！（ただいまー！）」

「あっおかえり、スイウ、メティス、ミスチフ、ゼニガメ。ありがとう、こんなにたくさん集めてくれて。…あれ？何かの視線を感じるような…？」

「ゴロ…？（そういえばそうかも…？）」

「ゼニ。（いや、思いつき感じるぞ。）」

そこでゼニガメが口を挟んだ。

「まあ気のせいよねっ。さてと、料理でも始めますかー！」

わーい！と五匹（一匹は控え目だったのでノーカン）が声を揃えて言った。

集めた小枝を並べ、ガーディの火炎放射で火をつけた。設置しておいた鍋をかける足に鍋をかけた。

しばらくするといい匂いが漂い始め、ヤマトの腹の音がぐううと鳴った。

「ヤマトー！できたよー！」

「わかった。」

内心かなり嬉しいヤマトはドキドキしながらも落ち着いてリンの下に向かった。その時ちょうどリンはできた料理をテーブルに並べているところだった。

「ヤマト、もう少し待ってね？まだパンが焼けてないから。」

テキパキと仕事をこなしながらリンが言う。よく見てみれば、ガーディは火炎放射でパンを焼いているし、あとの五匹はリンの手伝いをしていた。

「もう大丈夫よ、ガーディ。ありがとう。」

「ガウ！（どういたしまして！）」

ガーディが焼いていたパンをお皿に移そうとリンは手を近づけていく。

「（また嫌な予感……。）」

「あつつい！」

ヤマトが思った瞬間、リングがあまりの熱さに指を離した。

「大丈夫か！？」

思わずヤマトが駆け寄る。

「うん、大丈夫。スイウ、このハンカチを水鉄砲で濡らしてくれる？あと、少しだけ冷凍ビームも混ぜて？」

「ゴロ…。(一人じゃムリ…)」

「そつか。ならゼニガメ、スイウを手伝ってくれない？ゼニガメは水鉄砲、スイウは冷凍ビームの弱で。」

「ゴロ。(わかった。)」

「ゼニ。(任せる。)」

二匹は互いに頷きあうと、同時に水鉄砲と冷凍ビームの弱をくり出した。するとちょうどいい具合にハンカチが冷えた。そのハンカチをリンは熱いパンを触った指にあてる。

「つめたーい！」

「ゴロ。(我慢してよ、リン。)」

「…キル？(…誰?)」

ふとメティスが顔を上げた。しかしそこには誰もいない。が、メティスにはわかっているらしく、ある方向に向かって歩いていく。

「メティス? どうしたの?」

「…キル。(…誰かいるの。)」

そう言つてメティスはどこかにレポートした。リンはメティスを頭の中で追つた。エスパークタイプのメティスだからできることだ。

『キルキル?(…ここでなにしてるの?)』

『ゲツゲンガー!(…べつ別に何も!)』

『…キル?(…そう? さっきからずっと見てたみたいけど? 特にミスチフを、ね?)』

メティスが珍しくクスリと笑つた。相手のポケモンは基本的に黒いのでよくわからないが、少し赤くなつたようだ。

「…ゲンガーがいるみたい。どこかはよくわかんないけど、この近くのハズ。」

「ゲンガー?」

「うん。何か、ミスチフばかり見てるんだって。」

「ムツムウツ!? (…うつつちっ!?)」

ミスチフは少し恥ずかしそうに言う。

「みたいよ？メティスが言うにはね。あら、こっちに来ることになったみたい。」

とリンが言い終わると同時にメティスがゲンガーを連れてテレポトとして帰ってきた。

「おかえり、メティス。（こちらは初めましてね。私はリン。よろしくね？ゲンガー。）」

リンはあえて頭の中でゲンガーに挨拶した。

「ゲ？（え？）」

ゲンガーは右を向き、スイウ、ゼニガメ、ガーディに指差すが、三匹とも首を横に振った。

「ゲ？（え？）」

今度はゲンガーは右を向き、メティス、ミスチフ、メリープに指差すが、三匹とも首を横に振った。

「ゲンガー？（お前？）」

恐る恐るゲンガーは正面を向き、リンを指差した。

「正解よ。ゲンガー。で、どうしたの？」

「ゲ…ゲンガー…。（そ…その…。）」

ゲンガーはモジモジする。

「ゲ…ゲンガー！（オ…オレも連れていってくれ！）」

「は？」

ゲンガーの爆弾発言にリンはア然とした。

「リン、ゲンガーは何て？」

一人状況を把握できないヤマトがリンに問う。

「旅に連れて行ってほしいって。」

「は？」

ヤマトもア然とした。

「ゲ…ゲンガー？（ダ…ダメか？）」

「いいけど…私にはもうミスチフがいるからゴーストタイプはちょっと…いや！あなたが嫌いなワケじゃないのよ！？そんな顔しないでー！」

「…俺が連れていこうか？」

落ち込んでいるゲンガーとそれを必死に宥^{なだ}めているリンのそばでヤマトが呟いた。

「え？」

「ゲ？（え？）」

リンとゲンガールの声は見事に八もった。

「俺が連れていけば、ミスチフとも一緒だし、それに俺にはゴーストタイプがないからな。ゲンガー、お前の気持ちはどうだ？嫌なら嫌……。」

「ゲンガー！（よろしくお願いします！）」

ゲンガーはヤマトと言葉を遮り、目をキラキラさせて言った。

「よろしくお願いしますって、ヤマト。」

「そうか。こちらこそよろしくな、ゲンガー。」

「ゲン！ゲンガー！（おう！よろしく！）」

ヤマトはゲンガーにボールを当てた。ゲンガーは素直にボールに入った。二丁三回ユラユラと揺れてから中央の赤い光が消えた。

「出てこい！ゲンガー！」

「ゲンガー！（おう！）」

こうして元気なノリのいいゲンガーが新たな仲間に加わった。

「今からちよつどご飯なの。ゲンガーの分も用意するからねっ。」

「ゲンガー！（やったー！）」

リンは慌てて鍋のところに向かった。

「あらら。火が消えちゃってる。ガーディ、お願い。」

「ガウ！（任せる！）」

ガーディは火炎放射弱をくり出し、薪に火をつけた。そしてコトコトと鍋の中のシチューを温めた。

「はい、どうぞ。」

「ゲンガッ。（ありがとうっ。）」

「どういたしまして。さて、食べましょう。」

「いただきまーす！と、二人と七匹（一匹例外有り）が声を揃えて言った。

「どうかな、みんな、美味しい？上手くできてる？固くない？生じゃない？」

「ゴロ。（心配し過ぎ。大丈夫っ。美味しいから。今まで失敗したことないじゃないっ。）」

「ありがとう、スイウ。あれ？ヤマト、どうしたの？」

ヤマトは一口シチューを食べたまま動かなくなった。よく見てみると、ふるふると細かく震えている。

「ヤマト…ト…?」

恐る恐るヤマトに話しかけるとヤマトがサッとリンの方を向いた。

「リン!」

「な…何でしょう…?」

「旨い!こんな旨いもの初めて食った!」

「え?」

リンはキョトンとした。

「ああ、すまない。実は俺の母親が料理下手でさ。いつも姉さんに作ってもらってたんだが、実際俺のほうが姉さんより料理上手かったんだ。」

「そうなんだ…っていつか、ヤマトお姉さんいたんだ!」

「ああ。まあ、最近は会ってないけどな。」

「へえー…いいなあ…。」

リンがシチューを口にしながら少しだけ寂しそうな顔をする。その様子をヤマトは見逃さなかった。

「リン、どうかしたのか?」

「うっうん!何でもないの!気にしないで!」

「そうか…?」

「うん！いいから！早く食べてしまおうよ！みんな、おかわりはたくさんあるからね！」

わーい！と四匹が言う。（今度はスイウもメティスも論外）
やがて楽しい夕食が終わり、洗い物も済ませ、あとは寝るだけの状態でリンが薪の周りにみんなを集めた。

「さて、私がみんなをここに集めたワケは、自己紹介をする為です！新しくゲンガーも仲間に入ったし、私のパートナーたちもゲンガーに知ってほしいな、って思ってる。」

「ゲンガッ。（わかった。）」

「ありがとう、ゲンガー。まず一番手はこの子！キルリアのメティス！」

「キル。（改めてよろしくお願いね？ゲンガーさん。）」

「ゲンガー！（おう！よろしく！）」

メティスとゲンガーは握手を交わした。

「お次はこの子！ムウマのミスチフ！」

「ムウ！（よろしくね！ゲンガー！）」

「ゲ…ゲンガー。（お…おう。）」

ミスチフとゲンガーも握手を交わした。が、心なしかゲンガーの顔が少し赤くなっている。

「最後はこの子！私の切り札のミズゴロウのスイウ！」

「ゴロ。よろしくね、ゲンガー。」

「ゲン！（はい！よろしくッス！）」

スイウとゲンガーも握手を交わした。

ヤマトの手持ちの紹介も終わり、二人はそれぞれのテントでポケモンたちと共に眠った。

新たな仲間（後書き）

【ヤマト】

リンに聞いたんですけど、うららさん大丈夫ですか？

うう……。。

ソコソコかなあ？

【ヤマト】

寝ないといけませんよ？

今日はお出掛けするらしいからねー…。

あつ、そうそう、次回はヤマト視線の短編だから。

【ヤマト】

ええー！？

マジですか！？

マジです。

んではまた次回

【ヤマト】

うららさん！？

短編 想い(前書き)

特に何も無いから、省略しまーす！

【リン・ヤマト】

じらじらおん！…！

やばっ…。

短編 想い

気付けばあいつを目で追っている。

気付けばあいつを見ている。

気付けばあいつのことを考えている。

無意識とは恐ろしいものだ。

自分でも気が付かないうちにあいつのことを考えている。

なぜだかあいつを見るとドキドキする。

あいつの声で安心する。

他の男と話しているとムカついてくる。

俺は…病気なのか？

何か悪い病にでもかかったのか？

ヒカリに言われて気が付いた。

俺は、リンのことが好きなんだと。

その想いに気が付くと、あいつを直視できなくなる。

話すことさえままらなくなる。

本当はたくさん話したくて話したくて仕方ないのに。

やはり俺は病気なのかもしれない。

もしくは魔法にかかったか。

もしかしたら一目惚れだったのかもしれない。

しかし、そうではないと思う。

あいつの心に俺は惹かれたんだ。

あいつの長い藍色の髪も、美しい琥珀色の瞳も、あの優しい声も、いつも見せる笑顔も、たまに見せる悲しそうな顔も。

あいつの全てが俺を苦しめる。

あいつは俺のことをどう思っているんだ？

あいつにとって、俺の存在はなんだ？

自分では出せない問いばかり考える。

あいつがいとおしい。いとおしくて堪らない。

俺は今ここで誓う。

俺がリンを守る。

たとえこの身が滅んだとしても。

ずっとリンのそばにいる。

伝説に出てくる者として。

そして、あいつを愛する人間のうちの一人として。

何があるとしても。

短編 想い(後書き)

やばい…。

逃げなきゃ…。

【リン】

うららら さん！

逃がしません！

【ヤマト】

覚悟して…って、リン！？

お前なんでここに！？／＼／＼

【リン】

なんでって…。

いちゃダメなのお？(ちょいづる田)

【ヤマト】

なっ…／＼／＼／＼／

(ニヤニヤ)

迷子…そして迷子（前書き）

こんにちは…。

ご無沙汰しております…。

【リン】

うらら さん！

はっはいいい！

【リン】

どれだけ間が空いたと思っているんですか！

一ヶ月ですよ！？

一ヶ月！！

だっだってえ（泣）

【リン】

だっだっじゃありません！

迷子…そして迷子

朝になり、朝食を食べ終えたリンたち一行は、ハクタイの森の出口を目指して歩を進めていっていた。

そして今はちょうどお昼時である。

「ここどこ？まだつかないの？」

「多分まだだろう。」

「ええー…。あれ？」

リンは何かを見つけて立ち止まった。ヤマトはリンの視線を追い、同じように立ち止まった。

「…イーブイ？」

「ボロボロになってるな。」

「しかもさ、何かすごい汚れてるよね…？」

リンとヤマトの視線の先にはボロボロで、ものすごく汚れたイーブイが周りをキョロキョロと見回していた。

「リン、話しかけてみれば？」

「話せるかなあ？警戒はしてなさそうだけど…。」

「ゴロ？ゴロゴロ？（話してみたなら？あの子、全然警戒してないよ？）」

スイウがリーダーである頭のヒレをピクピクと揺らしながら言った。

「ふう…やってみるよお…。」

おずおずとリンはイーブイに近づいた。

「（こ…こんにちは。）」

「ブイツ。（こんにちはっ。）」

全然警戒していないようだ。

「（ここで何してるの？体だってすごい汚れてるし、お腹も空いてるみたいだけど…？）」

「ブイ…。（実は私、進化したくて…。）」

「（進化？）」

リンはキョトンとして聞いた。

「ブイ。ブイブイブイ。（はい。この森には触ると進化できるコケだらけの岩があるんです。）」

「（そうなんだ…。）」

「ブイ。ブイブイ、ブイ？（はい。私、その岩が探さないとイケな

いので、そろそろ失礼しますね？」

そう言ってイーブイは後ろを向いて、歩き始めた。

何となくそのイーブイが可哀想になって、気づけばリンはこんなことを言っていた。

「ねえ！あなた！せめてご飯でも食べた方がいいよ！私たちと食べない!？」

「ブイ？（え？）」

「リン!？お前何を言っ」

「ちょうど今からお昼だし、作る量もともと多いからあなたの分くらいあるわ!」

「ブ…ブイ…。（で…でも…。）」

「何日ご飯食べてないのよ。」

「ブイ…?。（2日…かな？）」

「お腹空いてるでしょ?」

「ブ…ブイ…。（う…うん…。）」

「ゴロ。（いいから、おいで?必要であれば私が体を洗ってあげるわ。）」

「ブ…ブイ…。（じゃ…じゃあ、お願いします…。）」

おずおずとイーブイが近づいてきた。

リンは早速その場で調理を開始した。

その間にスイウ、メティス、ゼニガメ、ガーディがものすごく汚れたイーブイを洗おうとしていた。

「ゴロ。(濡らすよ。冷たいかもしれない。)」

「ブ…ブイ…。(は…はい…。お願いします…。)」

ブシャアッとスイウがイーブイに水をかけた。

「…ゴロ。(…しつこい。)」

思わずスイウも顔をしかめるほどのひどい汚れであった。

「ゴロゴロ？(ゼニガメも手伝ってくれない？)」

「ゼニ。(ああ。)」

今度は二匹同時に水鉄砲をする。
すると少しだけ汚れが落ちた。

「ゴロ、ゴロゴロ。(リン、私たちじゃきれいにできない。)」

「ええー…わかったよお。もう少しでご飯できるから、それまでできるだけ汚れを落としておいてくれる？」

「ゴロ。(わかったわ。)」

「それでいいかしら？イーブイ。」

「ブイツ。（構いませんっ。）」

イーブイの元気な返事にリンは少し微笑んだ。

「ゼニ。（バブル光線。）」

ゼニガメのバブル光線によって、あっという間にイーブイの体は泡だらけになった。

「でーきたっ ってええ!？」

そんな光景を目の当たりにしたリンは皿を持ったまま大声を出した。

「ゴロ!?!ゴロゴロ!!(リン!?!違うのよ!!)」

「キル。キルル。(ごめんなさい。わざとではないの。)(」

「ゼニ。ゼニガ。(すまない。俺のせいだ。)(」

「びっくりしたあー…。あ、ヤマトー!?!ご飯できたよー?」

「マジでか!?!っしやー!」

「とは言っても簡単なものなんだけどね。」

今までボールの手入れをしていたヤマトがリンの近くにやってくる。

「構わん構わん！ゲンガー！メリープ！出てこい！」

「ミスチフも出てきて！」

「ゲンガー！（メシー！）」

「メリー！（やったあ！）」

「ムウー！（ご飯だー！）」

元気よく三匹が飛び出してきた。

「簡単なものでごめんね？」

「ムウ。（いいよいいよっ。いつもありがとう、リン。）」

「ありがとう ミスチフ」

リンはにっこりと笑って簡易の机に作ったサンドイッチを置く。

「そーだ。ガーディ、その子を乾かしてくれない？さすがに濡れたままだと机が濡れちゃうし…。」

「ガウ！（おう！）」

そう元気な返事をリンに返すと、ガーディは熱風でイーブイを乾かした。

「ブイブイッ （ありがとうございませす）」

イーブイがそう明るく言うと、もともと体が赤いはずのガーディの顔が少し赤くなった。

「ガツガウツ！（べっ別にっ！）」

そう言ってガーディはそっぽを向く。

そんなガーディを見てリンや周りのポケモンたち（イーブイは除く）はクスクス笑っている。

「…一体何があつたんだ？」

唯一状況が把握できないヤマトがリンに問う。

「あのね、フフフ、ガーディ、あのイーブイに恋しちゃったみたい

」

と実に楽しそうに言う。

「ほおー？そうかー。」

とヤマトがニヤニヤしながら言う。

なんだかんだあつたが昼食を済ませ、リンはイーブイを洗うことにした。

「さて、大変そうね。…の前にミスチフ、昼間だけボールに戻る？」

「ムウ…ムウマ…。(うん…そつする。(…))」

ミスチフは眠たそうに言う。
昼食の時間は元気に出てきたが、やはりゴーストタイプにとって昼間はキツいらしい。

「わかったわ。戻って、ミスチフ。」

「お前もだ。ゲンガー、戻れ。」

ヤマトもゲンガーを戻す。

「さて、大仕事ね。ううう…大変そう…。」

「俺も手伝おうか？」

「ええ。頼むわ。」

「了解」

リン、ヤマトの前にはイーブイがちょこんと座り、スイウ、メティス、ゼニガメ、ガーディ、メリープがイーブイを囲んでいる。

「さてと。スイウ、ゼニガメ、水鉄砲。メティスは水鉄砲を念力でシャワーのようにして。」

「ゴロゴロ。(了解)」

「ゼニ。(任せろ)」

「キルキル。(わかったわ)」

まずスイウとゼニガメが水鉄砲をし、それをメティスが念力で細かいシャワーに変えた。それは上手い具合にイーブイに降りかかった。

「よし。ストップ。このシャンプーを使ってっつと…。」

リンは手に持っていたシャンプーをイーブイに着けると、それをヤマトに渡し、イーブイを優しくシャンプーし始めた。

「ブイブイ（シャンプーお上手ですね）」

「そうかな？まあ、家でよくスイウをシャンプーしてたから慣れているの。」

「…ゴロゴロ…。（…何か私が一人で泥んこになったみたいじゃない…。）」

「ちっちがっ！そういう意味じゃなくて…っ！」

少しいじけたように言うスイウをなだめるようにリンが言う。

その二人（一人と一匹？）の行動は周りにいるヤマトやポケモンたちを笑わせた。

とそのとき、ヤマトの頭の中に自分たちが何かに追われるような映像が映った。

「（これは…一体…？）」

そう思ったとき、その映像は消えた。

「（やたらリアルだったなあ…。）」

「ふう！やつと綺麗にN…あれ？あなた、色が…？」

ヤマトの思考は突如、リンの驚いたような声に邪魔された。

「どうした…ってええ！？」

リンとヤマトの目の前にいるイーブイはリンとヤマト、その他のポケモンたちの目を奪った。

迷子…そして迷子（後書き）

ふえーん！

【ヤマト】

あの…じぶん…さん…。

ギクウツ！

ヤ…ヤマトも私を怒りに来たの…？

【ヤマト】

そうじゃなくて…。

その…。

何？ヤマトが聞きたいのはきつと、

「どうしてリンは自分のこと以外には敏感なんですか？」

っしてアコよね？

【ヤマト】

はっはっ…

そう…です…／／／／

いい？ヤマト。
それはね………

リンだからよ。

【ヤマト】
なんですか！？
それ！

迷子と不思議なイーブイと追う者と追われる者【前編】（前書き）

皆様、

大変申し訳ありません！！

はい！弁解は致しません！

とゆー訳で、本編へGO！

あとでリンに怒られる…（泣）

迷子と不思議なイーブイと追う者と追われる者【前編】

「色が違う!?!」

そのイーブイは普通のイーブイより、体の色が濃かった。

「ブ…イ…。(やっぱり…変ですよ…)」

「うっん!そんなことない!とっても綺麗だよ!?!」

「ああ!全然変なんて思わないさ!」

「ゴロ、ゴロゴロ。(私はとっても綺麗だと思うわ。)」

「キル。キルキル。(ええ。スイウ姉さんの言う通りよ。)」

「ゼニガ。(ああ。)」

「ガ…ガーディ!(とっ…とっっても綺麗だと思うっ!)」

「メーリー (いいなー綺麗な色で)」

その場にいる全員が口々にイーブイを褒めちぎる。

「…ブイ?(…そうですか?)」

「ええ。」

そう言ってリンは誰をも包み込む笑顔でイーブイに見せた。

「ムサシ、コジロウ、見るニャ！色違いのイーブイニャ！」

と喋るニャースが望遠鏡のようなものを見ながらそばにいる赤い髪の女性と青い髪の男性…ムサシとコジロウに言った。

「色違いのイーブイか！珍しいなー！」

「あいつを捕まえてボスに献上すれば…？」

「「シンオウ征服スピード出世でいい感じい！？」」

「ソーナンス！」

「マーネネツ！」

「決まったら早速行動ニャ！」

そうニャースが言うと、二人と三匹はコソコソ行動を開始した。…

…同時に、もう一つ別の組織も行動を開始していた。

「どうしてそんなに進化したいの？もしかして体の色に理由があったりするの？」

ガーディの熱風で乾かされたイーブイにリンが問う。その問いにイーブイは体をビクンツと反応させた。

「ブイ…。（実は…。）」

イーブイの口から聞かされたものは、リンとその周りのポケモンたちを驚かせた。

「リン…何て言ってるんだ？」

唯一ポケモンと話すことの出来ないヤマトがリンに問う。

「あのね…この森の深いところにこのイーブイたちが住む里があるんだって。そこで普通に生まれて普通に育ったんだけど、この体の色が原因でいじめられたりもしたらしいの。それでとうとう言われたんだって。『悔しければ、この森の何処かにあるコケに覆われた岩に触れて進化して来い』って…。この子の親はもちろん止めた。けど、この子はすつごく悔しかったから、進化すれのために旅に出たんだって。それで私たちと会ったみたい。」

リンは要約してヤマトに言った。

「なんてことを…。」

それを聞いたヤマトはそう言ってイーブイの頭を撫でた。

「で、イーブイ。一つ提案なんだけど、その岩探すの、私たちも手伝おうか？」

みんなで探したほうが早く見つかると思うのよ、とリンは笑いながら続ける。

その笑みはイーブイにとって、まるでどんよりと曇った空から一筋の光が差すようだった。

「ブ…ブイツ!? (ほ…本当ですかっ!?)」

「ええ。みんなも反対はないでしょう?」

とリンが回りに聞くと、全員から三者三様の肯定の返事が帰ってきた。

「ゴロ、ゴロゴロ。(と、言うわけで、早速探しに行かない?ここ
にずっといても何も起きないし。)」

と取り敢えず話が一通り終わったと思ったスイウが口を挟んだ。

「そうね。じゃあ少し待ってて?」

片づけるから、とリンが続けた。

ほんの少しすると、今までであった荷物がすっかり片づいていた。

「さて、行きましょう。」

リン、イーバイ、スイウを先頭に、一向はハクタイの森をズンダカズンダカ進んでいた。

「へえー!!イーバイのお父さんはサンダースで、お母さんはグレイシアなんだ!!」

「ブ、バイ…。(は、はい…。)」

そう答えるイーバイの表情は恥ずかしそうだが、嬉しそうでもあった。

「ブイ、ブイブイ。（母は、北の方のポケモンなんです。こっちに
来る途中に、凍った岩があって、それに触れたらグレイシアになっ
ていたそうです。）」

「お父さんは？」

「ブイブイ、ブイブイ。（父は、友人のライチュウさんから頂いた
雷の石で進化したそうです。）」

「そうなのね。」

とリンが微笑んだ瞬間、イーブイは何かアームのようなもので連れ
去られ、リンたちには網が投げられた。

「な、なによー！これー！」

とリンは叫ぶ。

「なによー！これー！の声を聞き、」

「宇宙の果てからやって来た」

「風よー！」

「大地よー！」

「大空よー！」

（すみません、めんどいので割愛 (三)）

「こら作者！割愛すんじゃないわよ！」

「ムサシ！落ち着けて！」

「ふん！まあいいわ！それより、この珍しい色違いのイーブイは頂
くわ！」

「ブイー！（いやだー！）」

「イーブイ！」

リンはとっさに叫ぶ。

イーブイはどうかアームから逃れようとしたばたしている。

「ガーデイ！火の粉！」

「ガウ！（火の粉！）」

ヤマトの指示で、網が少し焼かれた。

ガーデイの焼いた穴はすぐに大きくなり、ヤマトとリンもポケモン
たちを連れて網の外に出た。

「くっ！仕方ないわ。ここは逃げるが勝ちよー！」

そうムサシの言葉と共に、大きなロボットごとロケット団は立ち去
った。

「卑怯者！仕方ない…ミスチフ！出てきて！」

「ムウー！（なによあいつ！）」

ミスチフもご立腹のご様子。

「メティス、ミスチフ、あのロボットを見つけてきて？見つけたら私に知らせて。」

「ムウ！（了解！）」

「キル。（わかったわ。）」

そう答えるとメティスはテレポートをし、ミスチフは姿を消した。

「ゲンガー！お前も行け！」

「ゲンガッ！（おうっ！）」

出てくるや否やすぐにゲンガーは姿を消した。

「私たちも探しに行きましょう。」

「ああ。」

迷子と不思議なイーブイと追う者と追われる者【前編】（後書き）

【リン】

じららさん！

はいいい！

【リン】

この小説、4ヶ月放置ってどういうことですか！

…ごめんなさい

スライディング土下座します…

【リン】

スライディング土下座？

…私の心友がそうメールの題名で送って来たの

【リン】

で、パクった、と。

…だって、何か好きなんだもん！

スライディング土下座！

【リン】

あー、はいはい

もうスライディング土下座を語らないでください

…ごめんなさい

【リン】

取り敢えずここで一応終わりますよう

うーらー さん、覚悟しておいてくださいね？

リ、リン…

笑顔が黒いよ…？

【リン】

なーに言ってるんですか！

そんなわけありません！

では、次回をお楽しみ（！？）に…！！

（ガタガタガタガタガタガタガタガタガタ）
（ ）

迷子と不思議なイーブイと追う者と追われる者【後編】（前書き）

…非常に申し訳ないです！

【リン】

じらじら さーん

いじやー！…

あとにしてえ！…！）（ビュンッ） 全力疾走で逃げる音W

【リン】

あ、逃げた。

まだ何も言っでなかったのに…。

【ヤマト】

と、とにかく、本編どうぞぞ！

迷子と不思議なイーブイと追う者と追われる者【後編】

「ブツブイッブイッ！」

イーブイはオリをガタガタと揺らして騒いでいる。

「ったくうるさいわねー。ニヤース、何て言ってるのぉ？」

「『いやだ！出して！』って言ってるニヤ。」

「全く…。」

ムサシが溜め息をついた瞬間、イーブイは目を細めた。

「ブ…ブイッ！」

ガシャーんツという音を立ててオリが壊れた音がした。

「な、何だぁ！？」

ムサシとコジロウ、そしてニヤースの2人と1匹の中心を見ると、オリが大破しており、その壊れたオリの上でイーブイが戦闘体制に入っていた。

「何よ！やるつての！？」

「ブイッ！ブイブイッ！」

「『かかってこい！』って言ってるニヤ。」

「まったく生意気なイーブイね！行くのよ！ハブネーク！」

カチンときたムサシは、ボールからハブネークを繰り出した。

「ハブネーッ！」

「ハブネーク！ポイズンテール！」

「ハーブ…」

まさにハブネークのポイズンテールが当たらんとするその瞬間、1つの力強い声が聞こえた。

「スイウ！ハイドロポンプ！」

「ゴ…ローッ！（ハイドロ…ポンプ…ッ！）」

狙いを定めて放たれた高圧力のハイドロポンプは、真っ直ぐハブネークに当たった。

「ハッハブネッ！？（なっなにっ！？）」

「何よあんた！つか、どうやってここまで来たのよ！」

「親切なだれかが教えてくれたのよっ！！！」

ドンッという効果音が似合うような仁王立ちをしたリンと、その足元で怒ったようなスイウとメティスの姿がそこにはあった。

回想

それは、今より30分ほど前のことだ。

「イーブイッー！」

「おーい！イーブイー！」

「ゴロゴロ。(リン、この辺にはいないかも。)」

頭のヒレのリーダーで辺りを探ったスイウがそうリンに言った。

「ヤマト、スイウがこの辺にはいないかもって。」

「マジかよっ！ったくあいつらどこに行ったんだ？」

髪をぐしゃぐしゃとしたヤマトは、若干怒ったような口調で言った。

「まあまあ、そんな怒らないですよ。少し休憩する？」

「いや、別にいいさ。それより、メテイスとかに聞いてみればいいんじゃないの？」

「あー！ナイスアイデアだよ！ヤマトー！」

ヤマトの考えに賛成をしたリンは、彼にニッコリと笑いかけ、メテイスとシンクロを始めた。

一方のヤマトは、リンに笑いかけられてバクバクと鳴る心臓を、木

に手をつきながら必死に落ち着かせていた。

「繋がった。メテイス、聞こえる？」

「（ええ。聞こえるわ。）」

そんなメテイスの声が聞こえた。

「ロボット見つけた？」

「（…いいえ。リンは？）」

「こつちも全然よ。」

リンは溜め息混じりに言った。そんなリンに、くすくすと笑うメテイスの声が聞こえた。

「もうっメテイス笑わないでよっ。」

「（ふふふ、ごめんなさい。そろそろそつちに戻りましょうか？）」

「ええ、お願い。ミスチフとゲンガーもよろしくね？」

「（ええ、わかったわ。）」

それを最後に、メテイスと通信を切った。

「メテイスはなんて？」

振り向いたリンに、ヤマトが問いかける。

「まだ見つかってないって。取り敢えず、メティスがミスチフとゲンガーもつれてこっちに戻ってくるって。ほら。」

リンが言い終わると同時にメティス、ミスチフ、ゲンガーがテレポートで戻ってきた。

「ありがとう、ミスチフ。戻って。」

「お前も戻れ、ゲンガー。」

戻ってきたミスチフにお礼を言っ^{お礼}てリンはボールに戻し、ヤマトも^{お礼}労うようにゲンガーをボールに戻した。

「なかなか見つからないわね。ったく、どこに行ったのかしら?」

「もう少し探してみるか?」

「ええ、そうしましょう。」

ヤマトの案に賛同し、リンは少し辺りを探してみることにした。ヤマトはその反対方向だ。

と、そのとき、ガサガサツと近くの草むらが揺れ、リンは誰かに口を塞がれた。スイウとメティスはそれぞれエーフィとブラックキーにサイコキネシスで動きを封じられていた。

「ん!?んー!?!」

「しー。静かにするんだ、リン。」

「ん……？」

急に名前を呼ばれたリンはびっくりして騒ぐのを止めた。その声に聞き覚えはないが、どこか安心する男性の声だった。

リンはその男性の顔を見ようとしたが、深くフードを被っていたため、それは叶わなかった。

「お前が探しているイーブイを見つけた。こっちだ。」

そう言うと、その男性はリンの口から手を放した。同時にエーフィとブラッキーにスイウとメティスを開放するよう指示を出した。

エーフィもブラッキーもスイウなんか比ではないほどよく鍛えられていて、その上、2匹ともその男性を強く信用しているようだった。

「どうして私の名前を知っているの？あなたはだれ？」

「……………昔からお前を知っている……………それだけだ。」

そう言うとさっさと歩みを進めた。不思議に思いながらもリンはあとをついて行った。ちらと隣を歩くエーフィとブラッキーを見ると、艶々した綺麗な毛並みをしていることに気づいた。

「……………なにか私たちに用か？」

不意にリンの頭の中に声が流れた。その声の持ち主を探してみると、エーフィの額の石が淡く光っているのに気づいた。

「あつごめんなさい。ただ、毛並みがすごく綺麗だなんて思ってたただけなの。」

「（……ツクク。）」

申し訳なさそうに謝るリンに、エーフィの笑い声が聞こえた。その様子に気づいたららしい男性はリンの方を向いてボソリと言った。

「……そうか、お前も……。」

「え……？」

「いや、こつちの話だ。」

男性の一人言に首を傾げながらもリンはついて行った。ついて行きながら気づいたことがあった。それは、男性がリンの歩くスピードにちょうどぴったりの速さで歩いていることだった。不思議に思い、リンは首を傾げた。

「（どうしたの？リン。）」

「（なんか……この男の人、不思議だなんて思っで。）」

「（不思議？）」「」

スイウとメティスの声がぴったり揃った。

「（うん。なんか……）」

「着いたぞ。あそこだ。見えるか？」

「え？あ、はい。あ……アイアンテール覚えてるんだ……。」

少し開けたところが見えた。そこには、ロボット、ロケット団、そして、オリを破壊するイーブイの姿があった。じーっと見ていたため、リンは案内してくれた男性が消えているのに気がつかなかった。

「まったく生意気なイーブイね！行くのよ！ハブネーク！」

「ハブネーッ！（生意気なやつめーっ！）」

「ハブネーク！ポイズンテール！」

「ハープ…。（ポイズ…。）」

「スイウ！ハイドロポンプ！」

「ゴ…ローッ！（ハイドロ…ポンプーッ！）」

高圧力のハイドロポンプは真っ直ぐハブネークに向かって行った。

「ハッハブネッ！？（なっなにっ！？）」

「何よあんた！っーか、どうやってここまで来たのよ！」

「親切なだれかが教えてくれたのよっ…！」

怒ったようなスイウとメティスを従え、リンはドンツと仁王立ちした。

回想終了

ハイドロポンプを真正面から受けたハブネークはものすごい勢いで飛んでいき、木に体を打ち付けて目を回していた。

「メティス、テレポートでイーブイを助けるのよ!」

「キルツ。(テレポートツ。)」

メティスは直ぐにテレポートをして、イーブイをつれて戻ってきた。

「ミスチフ!出てきて!」

「ムウー!(許さないもーん!)」

出てきたミスチフも、周りの状況をすぐに理解し、怒ったように言った。

「メティス。ヤマトをつれてきて。」

「キル。(わかったわ。)」

コクンと頷き、すぐにテレポートをして行った。

「こうなったら!実力行使だ!行け!サボネア!マネネ!」

「サボー!(コジローウ!)」

「マーネネツ!(わーいっ!)」

サボネアは出てきた瞬間、ゴジロウに飛びついていった。

「な、なにが起こってるのかな…?」

「ゴ…ゴロ…? (さ…さあ…?)」

「ムウ……。 (よくわかんない……)。」

リン、スイウ、ミスチフは呆れ顔だ。

「いでっ！こっちじゃないって言うてるだろうが！マネネ！ムウマにサイケ光線！サボネア！ミズゴロウにタネマシガンだ！」

「ニヤーも行くニヤー！乱れひっかきニヤー！」

「マネネッ。(サイケ光線ッ)。」

「サボー！（タネマシガンー！）」

3匹同時にスイウ、メティスに襲いかかってくる。

「3匹同時って卑怯ね。大人げないわ。」

「それがロケット団さー！」

「サイテーね。スイウ！ミスチフごと守る！ミスチフ！マネネに驚かす！」

「ゴロ。(守る)。」

「ムウ！（驚かす！）」

緑色の膜がスイウとミスチフを覆い、守るで攻撃が消されるのを待ち、マネネにミスチフが技を繰り出す。

「マ…ネネ…。（も…むり…）」

「マネネ！？戻れ！」

マネネがあっさり倒され、ニヤースとサボネア、スイウとミスチフは睨み合う。

「乱れひっか…。」

「メリープ！ニヤースに十万ボルト！ガーディ！サボネアに火炎放射！」

とどこからともなく声が聞こえた。リンが後ろを向くと、メティスにつれられたヤマト、ガーディ、メリープの姿があった。

「メーリー！（十万ボルトー！）」

「ガーディツ！（火炎放射っ！）」

走りながらメリープとガーディは技を繰り出し、それは見事に急所に当たった。

「ありがとう、メティス。ヤマトもありがとう。」

「いや…別に…大丈夫…だ……。疲れたー！！」

テレポートでつれて来られた場所から全力疾走だったようで、ヤマトは大きく息を吐いた。

「さてと。そろそろ終わらせましょう。スイウ！ハイドロポンプ！メテイス！サイケ光線！ミスチフ！サイコウエーブ！」

指示を出し、一息挟んでリンは言った。

「思いつきりやつちゃって」

そのときの笑顔は、何処と無く黒かった。（ヤマト、後日談。）

「ゴローツ！（ハイドロポンプ！）」

「キルーツ！（サイケ光線ーっ！）」

「ムウーツ！（サイコウエーブ！）」

3匹の攻撃が混ざり、紫色のハイドロポンプになった。それがロケット団にぶつかった瞬間、爆発が起こった。

「「ヤな感じーいー！！」」

「ソーナンスー！」

キラリーンとお空の星になっていった。

「…いつの間にソーナンス出てたのかしら？」

「さあな…ってイーブイ!？」

ヤマトの声に反応してイーブイの方を向いてみると、イーブイはどこかに向かって走っていた。

「イーブイ!?!どこに行くの!?!」

「ちよっ!待て!リン!」

イーブイを追いかけ、リンも走り出した。スイウたちもそれを追って走っていった。

ヤマトは何処と無く嫌な予感がして立ち止まっていた。

ヤマトの頭の中には、何かに捕まっているリンの姿と、ボロボロのスイウ、メティス、ミスチフの戦っている姿だった。

「(…予知!?)リン!止まれ!止まるんだ!」

「え?何言って…:…きゃ　っ!」

ヤマトが叫ぶが、そのときは既に遅く、リンは突如現れたリングマに羽交い締めになれ、イーブイはオリに入れられていた。

迷子と不思議なイーブイと追う者と追われる者【後編】（後書き）

【リン】

うっすら さあーん

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい (ry)

【ヤマト】

一体何があったんですか？

や、別に深い意味は…。

【リン】

ないんですね？

…すみませんでしたあ！（ものすごい勢いでスライディング土下座）

【リン】

…許してあげないって言ったら？

ふええっ!？

ヤ、ヤマト助け…って、そこで念仏唱えないでーっ!!

【リン】

じゃあじぶらち、ちん、向いじぶで私とじっくりお話し、しましょね？

い　　ち　　(ブツッ)

【ヤマト】

…明けましておめでとごうございます。

新年初投稿となりました。

これからも(？)リンの旅記　　プラチナ　　をよろしく願います。

ヤマトの予知の真相と、方向音痴ちゃんの登場（前書き）

はい、すみませんでした。

何も言い訳しません。

とゆーわけでリン！

そんな怖い笑顔で近づいてこないでええ！！

ヤマトの予知の真相と、方向音痴ちゃんの登場

「よくやったぞ、ダークリングマ。」

と言いながら、何処からともなく白衣を着た男がニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべながら歩いてきた。その男に、リン、メティス、ミスチフの一人と三匹は見覚えがあった。

「ゴロ…。(お前は…。)」

「キル…。(また…。)」

「ムウ…。(許さない…。)」

そう一言ずつ言い、それぞれ戦闘体制に入った。ヤマトも参戦しようとしたが、気がつくのと周りをギンガ団に囲まれていた。

「お前の相手は我らだ。行け！ヘルガー！ゴルダック！」

「チッ行け！ゼニガメ！メリープ！」

「ゼーニガー！」

「メリー！」

ゼニガメは完全に戦闘体制に入っており、いつもは暢気なメリープも体をパチパチと光らせている。

「ゼニガメ！ハイドロポンプ！メリープ！雷！」

「落ち着いて！リングマ！自分を取り戻すのよ！」

リンは捕らわれながらも必死にリングマに呼びかける。が、リングマは反応を全く示さない。檻の中では、イーバイが暴れ、アイアンテールで何度も檻を壊そうとしていた。

「残念じゃのう、イーバイ。あの岩は偽物じゃ。只のプラスチックじゃ。よくできているじゃろう？」

とニヤニヤ笑いながら男が言う。それを聞き、イーバイは本当に悲しそうな顔をした。

「プルート！なぜイーバイが岩を求めていたことを……っ！！まさか…盗聴したのね！？」

「そうじゃ、ご名答。ソノオのあの発電所から君たちの会話を全て聞かせてもらった。それより、ちょうど良かったのう。まさか、希少価値の高いイーバイの、それも色違いも捕まえられるとはな。それに、有益な情報も手に入れられたものだしな。」

そう言うと、男…プルートは手元のスイッチを押した。押した瞬間、檻に一瞬だけ強い電気が流れ、イーバイは気を失って倒れた。

「イーバイ！くっ…！（メテイス！念力でリングマの腕を外して！）」

「（はい！念力！）」

メティスは念力でリングマの腕を外そうとした、が、それをリングマは弾いた。

「キル！？（なんで！？）」

「リングマ、あのキルリアに騙し討ち。ついでにあのムウマにも騙し討ちだ。」

「スイウ！守る！」

「フェイントだ。」

スイウはメティスの前に立って守るをしようとしたが、それはフェイントで未遂に終わり、飛ばされ、次にリングマの騙し討ちでメティス、ミスチフ共に飛ばされた。

「スイウ！メティス！ミスチフ！」

「さて、これで邪魔者はいなくなったな。向こうの若いのもだいぶ苦戦しておるようじゃいな。リングマ、そいつを連れて基地へ戻るぞ。」

プルトの言葉に、リングマはコクンと頷いた。

「いやよ！放して！放しなさい！」

バタバタとリングマの腕の中で暴れるリン。しかし、只の人間の少女が大型のポケモンの力に勝てるはずがなく、ビクともしていなかった。

「うるさい小娘だ。リングマ、シャドーパンチ。」

「……………」

リングマは何も言わずにシャドーパンチを繰り返した。それはきれいにリンの腹に入り、リンは気を失った。

ヤマトが苦戦しながらも大体を倒し、ふとリンの方を見ると、3匹が飛ばされているところだった。3匹は大ダメージを受け、HPももう残り少なかった。ヤマトはカバンからオボンの実を3つ取り出すと、ゲンガーにそれらを渡し、スイウたちを回復させるよう頼んだ。

「この状況下で手持ちを一体外すなんて余裕だねえ。ゴルバット！毒々の牙！」

「ゴルバット！」

「くっ！メリープ！10万ボルト！」

「メリープ！」

メリープが10万ボルトをしていると、メリープの体が白く輝いた。目の端にも白い輝きが見える。…ゼニガメだ。2匹は白い光、所謂進化の光を放っていた。

「なっ……………」

ギンガ団の1人が戦あついた。白い光が一際明るくなると、光は消え去った。その場に残ったのは、カメールとモココだった。

「よし！カメール！ロケット頭突き！モココ！雷！ガーディ！火炎放射だ！」

「カメーッ！」

「モコーッ！」

「ガーディッ！」

ザワザワ、ザワザワと木の葉が揺れる。

その様子を見ながら、桃色の長い髪に、アメジストのような透き通った紫色の瞳を持つ、大人びた少女はポツリ、と呟いた。

「……騒がしいわね。“アレ”が起きてるんだわ。」

足下をチヨコチヨコと歩いていたライチュウが少女の肩に飛び乗った。

「……ライ？」

何かを言ったライチュウに答えるように、少女は微笑んで頷いた。

「ええ。走るわよ。」

「ライ。」

ライチュウのその返事と共に少女は木の上に飛び乗り、身軽に飛び移りながら何処かへ向かっていった。

「ゴ…ローツ!!」

リングマの顔目掛けて素早く、一点に集中された威力の高いハイドロポンプが放たれた。それをまともに受けたリングマは、近くの木に背中をぶつけるほど飛ばされたが、プルトの命令通り、リンは放さなかった。その隙に、プルトが今まさに取るうとしていた檻が消えた。フラフラと立ち上がったスイウとメティスの元に、檻を抱えたミスチフとゲンガーが戻ってきた。檻の中のイーブイはたった今日を覚ました。

「キル。キルキル。」

「ブイ!ブイブイツ!」

「…キル。キル、キルキル。」

ガチャンと檻が開いた。メティスが念力で鍵を開けたようだ。檻から出たイーブイは、スイウ、メティス、ミスチフ、ゲンガーと共に戦闘体制に入った。

「チッ。イーブイは逃げてしまったか。仕方ない。リングマ、やれ。」

黙ってリングマは5匹V S 1匹の壮絶な戦いが幕を開けた。
スイウは基本的に攻撃をし、時には仲間を庇って守るを繰り返した。

メティスは影テレでリングマを惑わしながら攻撃を繰り返した。
ミスチフとゲンガーはゴーストタイプであることをフルに生かし、
消えたり現れたりしながら攻撃を繰り返した。

イーブイは隙については電光石火やアイアンテールを繰り返出し、誰かが攻撃する時には、手助けを繰り返したりした。
しかし、リングマはとても強く、まずはイーブイ、次にゲンガーが瀕死になり、残る3匹もボロボロの状態だった。

「ゴロ…ゴロゴロ…ッ！」

「……キルッ！」

「ムウッ！」

スイウの指示を受け、ミスチフはメティスを抱えて宙に浮かび上がった。それを確認したスイウは、真っ直ぐにリングマを睨み付けながら、地を激しく揺らした。地震だ。普通のミズゴロウは覚えることのできない地震を、何故かスイウは覚えている。

スイウの渾身の一発はリングマの急所に当たったようだが、リングマはまだきちんと立っていた。

「スイウ!?メティス!?ミスチフ!?イーブイ!?ゲンガー!?’

先程の地震で目を覚ましたリング、目の前に広がる光景を見て叫んだ。よく見てみると、スイウはフラフラしているが、倒れないようにしっかりと足を踏ん張り、耐えていた。しかし、目は虚ろだ。

そんなスイウは、次の攻撃にハイドロポンプをしようと準備してい

る。スイウの体は特性激流により青く輝いてはいたが、すでにHPは限界を超えているらしかった。次にハイドロポンプを放ちさえすれば、スイウは瀕死ではなく本当に死んでしまうだろう。

「スイウ！だめ！やめて！」

「ゴ…ローツ！！（ハイドロ…ポンプ…！！）」

「スイウ…！！」

スイウがハイドロポンプを放ち、リングが叫んだ瞬間、スイウの体が突如、白く輝いた。俗に言う、進化の光だ。光の中でスイウの姿は変わり、4本足から2本足になった。

依然としてハイドロポンプはしたままだったが、威力が上がっているのが見てとれた。パアツと光が弾けると、ミスゴロウだったスイウは、ヌマクローへと進化を遂げていた。

と、その時、どこからか凜とした声が響いた。

「綺嵐、波動弾。」

「トオゲキイツス！（波動弾！）」

ものすごいスピードで、一直線にリングマへ向かっていく波動弾は、スイウのハイドロポンプと混ざり合い、スピードと威力と迫力を上げながらリングマに迫った。

「雷莉、電光石火から瓦割り。」

「ライツ！（電光石火っ！）」

足下にいたライチュウは、波動弾より早くリングマに近づき、瓦割りでリンをリングマから救出した。その直後、超高威力の波動弾がリングマに当たり、リングマを一発で瀕死にさせた。

「あ、ありがとう、ライチュウ…。」

「ライ。ライライ。(いえ。お安いご用です。)」

大人しい性格なのか、ライチュウはそう言った。

「リン！大丈夫か!？」

「うん。大丈夫だよ。このライチュウのトレーナーさんが助けてくれたから…。」

慌てた様子で駆け寄ってきたヤマトにそう言ったあと、リンは立ち上がってお腹を押さえながらある方向へと真剣な顔で歩いていった。

「肩貸すぜ？リン。」

「ありがとう、ヤマト。」

リンの笑顔にヤマトがK.Oされたのは言うまでもない。

リンとヤマト、それにライチュウがスイウたちのところに着くと、そこには既に傷薬を手に持ち、トゲキッスを連れた少女が心配そうに眉を下げながらスイウたちの様子を見ていた。

「あ…。」

「あ、あなたたちはこの子たちのトレーナーね？」

「ああ、そうだ。イーブイは野生だが。」

ヤマトがそう言うと、少女はニコツと笑った。

「そう。私はツバキ。このトゲキッスは綺嵐で、このライチュウは雷莉よ。」

「トゲオキッス。（綺嵐です。）」

「ライライ。（雷莉です。）」

「私はリン。こっちはヤマトよ。ありがとう、助けてくれて。」

リンの言葉に微笑むと、少女…ツバキは、いきなり真剣な顔をした。「いきなりだけれど、この子たちの容体は最悪だわ。特に…この又マクロー。途中でミスゴロウから進化したからまだ良いものの、最悪なことには変わりないわ。」

「ツバキさん、このムウマとキルリア、それにゲンガーとイーブイは？」

心配そうな色を瞳に浮かべるリンを尻目に、ツバキはじいっと五匹を見た。

「ムウマとキルリアは丸一日寝れば目を覚ますわ。イーブイとゲンガーはもうすぐ目を覚ますと思うわ。けど…又マクローは今すぐ処置を施さなければいけないわね。雷莉、この周りにある綺麗な水の

場所まで案内して。」

ツバキの言葉に雷莉はコクンと頷くと、雷莉はクンクンと辺りの匂いを嗅いだ。

「ライチュツ！（こっちよっ！）」

「急ぎましょう。」

スイウを綺嵐の背に乗せたツバキは、メティス、ミスチフを戻し、イーブイを抱えたりんと、ゲンガーを戻したヤマトに言った。そして、三人は雷莉の後を追って走り出した。

ヤマトの予知の真相と、方向音痴ちゃんの登場（後書き）

【リン】

皆さん、お久しぶりです。リンです。

……私、ふと思ったんですけど、おかしくないですか？

【ヤマト】

？何がだ？

【リン】

あ、ヤマト。

私たち、まだハクタイの森にいますけど……遅すぎじゃない？進むペース。

【ヤマト】

あー…そういうえば、「ハクタイの森のここは大事だから長くなっちゃうかも！えへっ」って伝言をもらっているが…。

【リン】

……まさか、ツバキさんも関係あるのかしら？

【ツバキ】

呼びました？リンさん。

【リン】

あ、ツバキさん。

来ていただいたところ悪いんですが、そろそろ……。

【ツバキ】

ああ、ちゃんとわかってるから気にしないで？

じゃあリンさんよろしく。

【リン】

………？（ま、いつか）

また次回、お会いしましょうね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4893k/>

リンの旅記 プラチナ

2011年8月2日09時27分発行